別記様式第２号（その１の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

基　本　計　画　書

基　本　計　画		
事　項	記　入　欄	備　考
計画の区分	研究科の専攻の設置	
フリガナ 設置者	コクリツダイガクホウジンキョウトキョウイクダイガク 国立大学法人京都教育大学	
フリガナ 大学の名称	キョウトキョウイクダイガクダイガクイン 京都教育大学大学院　(Graduate School of Kyoto University of Education)	
大学本部の位置	京都府京都市伏見区深草藤森町１番地	
大学の目的	連合教職実践研究科は、学部における教員養成教育と現職教員の教職経験の上に、教育の理論と教職実践を深く追究させることにより、教職に関する高度専門的な知識と実践的指導力を統合的に有する教員の養成を目的とする。	
新設学部等の目的	連合教職実践研究科では、教育及び教科の理論と教職の実践との往還を通じて、教職に関する高度な専門的知識と実践的指導力を統合的に有する教員を養成することを目的とする。	

新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	備考
		年	人	年次 人	人		年　月 第　年次		
	連合教職実践研究科 [The United Graduate school of Professional Teacher Development] 教職実践専攻 [Program of Professional Teacher Development]	2	95	―	190	教職修士（専門職） [Master of Education (Professional Degree)]	令和４年４月 第１年次	京都府京都市伏見区深草藤森町１番地	教職大学院 大学院設置基準第14条における教育方法の特例を実施
	計								

同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）	
	○学生募集の停止 教育学研究科 学校教育専攻（廃止）　（△17）　（令和４年４月学生募集停止） 障害児教育専攻（廃止）　（△ 5）　（令和４年４月学生募集停止） 教科教育専攻（廃止）　（△35）　（令和４年４月学生募集停止） 連合教職実践研究科 教職実践専攻（廃止）　（△60）　（令和４年４月学生募集停止）

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数	備考
		講義	演習	実験・実習	計		
	連合教職実践研究科	０科目	１３５科目	４科目	１３９科目	４６単位	

教員組織の概要		学部等の名称	専任教員等 教授	准教授	講師	助教	計	助手	兼任教員等
			人	人	人	人	人	人	人
	新設分	連合教職実践研究科	28 (28)	19 (19)	1 (1)	0 (0)	48 (48)	0 (0)	57 (57)
		計	28 (28)	19 (19)	1 (1)	0 (0)	48 (48)	0 (0)	57 (57)
	既設分	該当なし	― (―)	― (―)	― (―)	― (―)	― (―)	― (―)	― (―)
		計	― (―)	― (―)	― (―)	― (―)	― (―)	― (―)	― (―)
	合計		28 (28)	19 (19)	1 (1)	0 (0)	48 (48)	0 (0)	57 (57)

教員以外の職員の概要	職種	専任	兼任	計	
		人	人	人	
	事務職員	68 (68)	28 (28)	96 (96)	
	技術職員	9 (9)	4 (4)	13 (13)	
	図書館専門職員	3 (3)	3 (3)	6 (6)	
	その他の職員	0 (0)	18 (18)	18 (18)	
	計	80 (80)	53 (53)	133 (133)	

校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	
	校舎敷地	102,778㎡	0㎡	0㎡	102,778㎡	大学全体
	運動場用地	37,946㎡	0㎡	0㎡	37,946㎡	
	小計	140,724㎡	0㎡	0㎡	140,724㎡	
	その他	0㎡	0㎡	0㎡	0㎡	
	合計	140,724㎡	0㎡	0㎡	140,724㎡	

校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	
	40,498㎡ (40,498㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	40,498㎡ (40,498㎡)	大学全体

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
	43室	71室	65室	3室 (補助職員 1人)	1室 (補助職員 0人)	大学全体

専任教員研究室	新設学部等の名称	室数	
	連合教職実践研究科	41室	

図書・設備	新設学部等の名称	図書〔うち外国書〕 冊	学術雑誌〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	
	連合教職実践研究科	454,392〔73,187〕 (454,392〔73,187〕)	11,367〔5,832〕 (11,367〔5,832〕)	4,597〔4,597〕 (4,597〔4,597〕)	3,546 (3,546)	7,359 (7,359)	0 (0)	研究科単位での特定不能なため、大学全体の数
	計	454,392〔73,187〕 (454,392〔73,187〕)	11,367〔5,832〕 (11,367〔5,832〕)	4,597〔4,597〕 (4,597〔4,597〕)	3,546 (3,546)	7,359 (7,359)	0 (0)	

図書館	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	
	4,482㎡	285	402,000	大学全体

体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要	
	1,417㎡	野球場 1 面	テニスコート 5 面

経費見積及び維持の概要		区分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	
	経費の見積り	教員１人当り研究費等								国費（運営費交付金）による
		共同研究費等								
		図書購入費								
		設備購入費								

学生１人当り納付金	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
	千円	千円	千円	千円	千円	千円

学生納付金以外の維持方法の概要	

学等

大学の名称	京都教育大学

学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	年	人	年次 人	人		倍		
教育学部 学校教育教員養成課程	4	300	—	1,200	学士（教育学）	1.07	昭和24年度 平成18年度	京都府京都市伏見区深草藤森町１番地
教育学研究科 学校教育専攻	2	17	—	34	修士（教育学）	0.67	平成2年度 平成2年度	京都府京都市伏見区深草藤森町１番地
障害児教育専攻	2	5	—	10	修士（教育学）	0.80	平成2年度	
教科教育専攻	2	35	—	70	修士（教育学）	0.91	平成2年度	
連合教職実践研究科 教職実践専攻	2	60	—	120	教職修士（専門職）	0.86	平成20年度 平成31年度	京都府京都市伏見区深草藤森町１番地

附属施設の概要	名　　称：附属幼稚園 目　　的：幼児に対する保育 大学における幼児の保育に関する研究への協力 学生の教育実習の実施 所 在 地：京都市伏見区桃山井伊掃部東町１６番地 設置年月：昭和２６年３月 規 模 等：土地２，４１５㎡　　建物　８７０㎡	
	名　　称：附属桃山小学校 目　　的：児童に対する教育 大学における初等教育に関する研究への協力 学生の教育実習の実施 所 在 地：京都市伏見区桃山筒井伊賀東町４６番地 設置年月：昭和２６年３月 規 模 等：土地１２，２９６㎡　　建物　５，７７１㎡	
	名　　称：附属桃山中学校 目　　的：生徒に対する教育 大学における中等教育に関する研究への協力 学生の教育実習の実施 所 在 地：京都市伏見区桃山井伊掃部東町１６番地 設置年月：昭和２６年３月 規 模 等：土地２２，０９１㎡　　建物　６，２１２㎡	
	名　　称：附属京都小中学校 目　　的：児童・生徒に対する教育 大学における初等・中等教育に関する研究への協力 学生の教育実習の実施 所 在 地：京都市北区紫野東御所田町３７番地（西エリア　初等部） 京都市北区小山南大野町１番地（東エリア　中・高等部） 設置年月：平成２９年４月 規 模 等：土地３７，４６０㎡　　建物１４，４４５㎡	
	名　　称：附属高等学校 目　　的：生徒に対する教育 大学における中等教育に関する研究への協力 学生の教育実習の実施 所 在 地：京都市伏見区深草越後屋敷町１１１番地 設置年月：昭和４０年４月 規 模 等：土地３７，２４５㎡　　建物　７，９６８㎡	
	名　　称：附属特別支援学校 目　　的：児童・生徒に対する教育 大学における特別支援教育に関する研究への協力 学生の教育実習の実施 所 在 地：京都市伏見区深草大亀谷大山町９０番地 設置年月：昭和４４年４月 規 模 等：土地３４，０８３㎡　　建物　４，３２７㎡	
	名　　称：教育創生リージョナルセンター機構　教職キャリア高度化センター 目　　的：教員養成段階から教職キャリアを積む過程全体の支援並びに支援に関する研究開発を行い、教員養成・研修の高度化を推進すること 所 在 地：京都市伏見区深草藤森町１番地 設置年月：平成３０年４月 規 模 等：建物１，５２９㎡	
	名　　称：教育創生リージョナルセンター機構　総合教育臨床センター 目　　的：特別支援教育並びに教育臨床心理に関する事業を推進すること 所 在 地：京都市伏見区深草藤森町１番地 設置年月：平成３１年４月 規 模 等：１９７㎡	
	名　　称：環境教育実践センター 目　　的：本学における環境教育を推進すること 所 在 地：京都市伏見区深草越後屋敷町１１２番地 設置年月：平成４年４月 規 模 等：建物７９３㎡	
	名　　称：情報処理センター 目　　的：全学の共同利用施設として、学術研究、情報処理教育及びその他の情報処理に資すること 所 在 地：京都市伏見区深草藤森町１番地 設置年月：平成６年２月 規 模 等：建物４７０㎡	
	名　　称：保健管理センター 目　　的：本学の保健管理に関する専門的業務を一体的に行い、もって学生及び教職員の心身の健康の保持増進を図ること 所 在 地：京都市伏見区深草藤森町１番地 設置年月：昭和５０年４月 規 模 等：建物３０４㎡	

京都教育大学　設置申請に係わる組織の移行表

令和3年度	入学定員	編入学定員	収容定員
京都教育大学			
教育学部			
学校教育教員養成課程	300	-	1,200
計	300	-	1,200
京都教育大学大学院			
大学院教育学研究科			
学校教育専攻（M）	17	-	34
障害児教育専攻（M）	5	-	10
教科教育専攻（M）	35	-	70
大学院連合教職実践研究科			
教職実践専攻	60	-	120
計	117	-	234

令和4年度	入学定員	編入学定員	収容定員	変更の事由
京都教育大学				
教育学部				
学校教育教員養成課程	300	-	1,200	
計	300	-	1,200	
京都教育大学大学院				
大学院教育学研究科				
学校教育専攻（M）	0	-	0	令和4年4月学生募集停止
障害児教育専攻（M）	0	-	0	令和4年4月学生募集停止
教科教育専攻（M）	0	-	0	令和4年4月学生募集停止
大学院連合教職実践研究科				
教職実践専攻	0	-	0	令和4年4月学生募集停止
教職実践専攻	95		190	研究科の専攻の設置（設置届出）
計	95	-	190	

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

（連合教職実践研究科　教職実践専攻）

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考	
共通科目	(1) 教育課程の編成・実施に関する領域		カリキュラムの開発と実践Ａ	1･2前		2			○		1						
			カリキュラムの開発と実践Ｂ	1･2前		2			○		1						
			カリキュラムの開発と実践Ｃ	1･2後		2			○		3	1					オムニバス・共同
	(2) 教科等の実践的な指導方法に関する領域		授業デザインとＩＣＴ活用Ａ	1･2後		2			○				1			兼1	オムニバス・共同（一部）
			授業デザインとＩＣＴ活用Ｃ	1･2前		2			○		5	2					オムニバス・共同
			教科指導実践演習Ａ	1･2前		2			○		2	1				兼1	共同
			教科指導実践演習Ｂ	1･2前		2			○							兼1	
			教科指導実践演習Ｃ	1･2後		2			○		1	3				兼1	共同
			保育内容指導法演習	1･2後		2			○		1	1				兼1	オムニバス・共同
	(3) 生徒指導、教育相談に関する領域		生徒指導・教育相談の理論と実践Ａ	1･2前		2			○		1						
			生徒指導・教育相談の理論と実践Ｂ	1･2前		2			○			2					共同
			生徒指導・教育相談の理論と実践Ｃ	1･2前		2			○		2	2				兼1	オムニバス・共同
			生徒指導・教育相談実践演習	1･2後		2			○			3					共同
			幼児期の教育相談	1･2後		2			○			1				兼1	共同
	(4) 学級経営、学校経営に関する領域		学級経営の実践と課題Ａ	1･2後		2			○		1						
			学級経営の実践と課題Ｂ	1･2前		2			○		1						
			学級経営の実践と課題Ｃ	1･2前		2			○		1	2					共同
			学校づくりと学校経営Ａ	1･2後		2			○		1					兼1	共同
			学校づくりと学校経営Ｂ	1･2後		2			○		2						共同
			学校づくりと学校経営Ｃ	1･2後		2			○		2						共同
			幼児期におけるクラスづくりと園づくり	1･2後		2			○		1	1					共同
	(5) 学校教育と教員の在り方に関する領域		現代社会と学校教育	1･2前		2			○		1	2					共同
			教員の職務と役割	1･2後		2			○		2						共同
			社会と学校教育・教員における現代的課題	1･2前		2			○		1	1				兼2	オムニバス・共同
			小計（24科目）	－		48			－		19	13	1			兼9	－
教職専門実習			学校臨床専門実習Ⅰ	1通		3				○	9	5	1			兼4	共同
			学校臨床専門実習Ⅱ	1･2通		7				○	9	5	1			兼4	共同
			教科研究専門実習Ⅰ	1通		3				○	19	14					共同
			教科研究専門実習Ⅱ	2通		7				○	19	14					共同
			小計（4科目）	－		20			－		28	19	1			兼4	－
コース必修科目	学校臨床力高度化系	初任期教員養成コース	特別支援教育の理論と実践	1･2後		2			○		2					兼1	オムニバス
			現代的教育課題の教材化と授業実践	1･2後		2			○			1					
			学校臨床とかかわり合う力Ａ	1･2後		2			○			1				兼1	共同
			学校における心理教育	1･2前		2			○			1					
			小計（4科目）	－		8			－		2	3	0			兼2	－
		中核教員・リーダー教員養成コース	学校臨床とかかわり合う力Ｂ	1･2前		2			○			1				兼1	共同
			現代の公教育と人間形成の課題	1･2前		2			○		1						
			小計（2科目）	－		4			－		1	1	0			兼1	－
		学校臨床力高度化系コース共通	省察実践研究Ⅰ	1通		2			○		8	4	1			兼4	共同
			省察実践研究Ⅱ	2通		2			○		8	4	1			兼4	共同
			小計（2科目）	－		4			－		8	4	1			兼4	－
	教科研究開発高度化系	人間発達探究コース	人間発達セミナー	1･2前		2			○		4	1				兼3	オムニバス・共同（一部）
			認知発達と学習の心理学	1･2後		2			○			1					
			特別支援教育の理論と実践	1･2後		2			○		2					兼1	オムニバス
			子育て支援の理論	1･2後		2			○							兼1	
			小計（4科目）	－		8			－		6	1	0			兼5	－
		教科学習探究コース	教科カリキュラム開発セミナー	1･2前		2			○		3						オムニバス・共同
			教科授業開発セミナー	1･2後		2			○		3						オムニバス・共同
			小計（2科目）	－		4			－		4	0	0				－
		教科研究開発高度化系コース共通	教育実践研究セミナー	1･2前		2			○		1	1				兼3	オムニバス・共同（一部）
			実践課題研究Ⅰ	1通		2			○		16	7					共同
			実践課題研究Ⅱ	2通		2			○		16	7					共同
			小計（3科目）	－		6			－		16	7	0			兼3	－
			小計（17科目）	－		34			－		24	12	1			兼12	－

コース選択科目	学校臨床力高度化系	初任期教員養成コース	授業コミュニケーション論	1･2前		2			○				1				
			授業研究の理論と実践	1･2前		2			○		1	1					共同
			授業力高度化演習	1･2後		2			○		2	1	1			兼1	共同
			小計（3科目）	－		6			－		3	2	1			兼1	－
		中核教員・リーダー教員養成コース	教育政策と教育行政・学校経営の課題	1･2前		2			○		1						
			学校・教員の裁量権と法的責任	1･2後		2			○		1						
			学校づくりとリーダーシップ	1･2後		2			○		1						
			学校組織改善の理論と手法	1･2前		2			○							兼1	
			教職員の意識と成長	1･2前		2			○							兼1	
			カリキュラムマネジメント	1･2後		2			○		2						共同
			小計（6科目）	－		12			－		4	0	0			兼1	－
		学校臨床力高度化系コース共通	学校におけるグループダイナミクス演習Ⅰ	1･2前		2			○			1					
			学校におけるグループダイナミクス演習Ⅱ	1･2後		2			○			1					
			危機管理のための事例演習	1･2後		2			○			1					
			子ども理解と臨床技法	1･2前		2			○							兼1	
			小計（4科目）	－		8			－		0	2	0			兼1	－
	教科研究開発高度化系	人間発達探究コース	幼小接続の理論と実践	1･2前		2			○		1						
			子育て支援の実践	1･2後		2			○		1						
			小計（2科目）	－		4			－		2	0	0				－
		教科学習探究コース	言語・文化セミナー	1･2前		2			○		1	1					オムニバス・共同（一部）
			公共・文化セミナー	1･2前		2			○		1	1					共同
			数理自然・技術セミナー	1･2前		2			○		3						共同
			健康・生活デザインセミナー	1･2前		2			○		1	1				兼8	オムニバス・共同（一部）
			芸術探究セミナー	1･2前		2			○			2					共同
			国語科教育実践演習　－日本語学－	1･2前		2			○							兼1	
			国語科教育実践演習　－近現代文学－	1･2前		2			○							兼1	
			国語科教育実践演習　－漢文学－	1･2後		2			○							兼1	
			国語科教育実践演習　－日本語教育学－	1･2後		2			○							兼1	
			社会科教育実践演習　－日本史－	1･2前		2			○			1					
			社会科教育実践演習　－西洋史－	1･2後		2			○							兼1	
			社会科教育実践演習　－近現代史－	1･2前		2			○							兼1	
			社会科教育実践演習　－地理－	1･2前		2			○							兼1	
			社会科教育実践演習　－法律－	1･2前		2			○							兼1	
			社会科教育実践演習　－政治－	1･2前		2			○							兼1	
			社会科教育実践演習　－社会学－	1･2後		2			○							兼1	
			社会科教育実践演習　－経済－	1･2後		2			○							兼1	
			社会科教育実践演習　－倫理－	1･2後		2			○		1						
			数学科教育実践演習　－解析－	1･2前		2			○							兼1	
			数学科教育実践演習　－応用数学－	1･2後		2			○							兼1	
			理科教育実践演習　－科学教育－	1･2前		2			○		1						
			理科教育実践演習　－分析化学－	1･2前		2			○							兼1	
			理科教育実践演習　－有機化学－	1･2後		2			○							兼1	
			理科教育実践演習　－動物分類形態学－	1･2前		2			○							兼1	
			理科教育実践演習　－生態学－	1･2後		2			○							兼1	
			理科教育実践演習　－植物進化形態学－	1･2後		2			○							兼1	
			理科教育実践演習　－地質鉱物学－	1･2前		2			○							兼1	
			音楽科教育実践演習　－声楽－	1･2前		2			○							兼1	
			音楽科教育実践演習　－器楽－	1･2前		2			○							兼1	
			音楽科教育実践演習　－伴奏－	1･2後		2			○							兼1	
			音楽科教育実践演習　－鑑賞－	1･2後		2			○							兼1	
			音楽科教育実践演習　－創作－	1･2後		2			○							兼1	
			音楽科教育実践演習　－授業実践史－	1･2前		2			○			1					
			美術科教育実践演習　－デザイン－	1･2前		2			○							兼1	
			美術科教育実践演習　－工芸－	1･2後		2			○							兼1	
			美術科教育実践演習　－美学・美術理論－	1･2前		2			○			1					
			美術科教育実践演習　－書道－	1･2後		2			○							兼1	
			保健体育科教育実践演習　－体育学－	1･2前		2			○							兼1	
			保健体育科教育実践演習　－健康社会学－	1･2前		2			○							兼1	
			保健体育科教育実践演習　－学校保健－	1･2後		2			○							兼1	
			保健体育科教育実践演習　－バイオメカニクス－	1･2後		2			○			1					
			技術科教育実践演習　－電気－	1･2前		2			○							兼1	
			技術科教育実践演習　－生物育成－	1･2後		2			○							兼1	
			技術科教育実践演習　－シミュレーション情報－	1･2前		2			○							兼1	
			技術科教育実践演習　－情報ネットワーク－	1･2後		2			○							兼1	
			家庭科教育実践演習　－衣生活－	1･2前		2			○							兼1	
			家庭科教育実践演習　－食生活－	1･2後		2			○							兼1	
			家庭科教育実践演習　－住生活－	1･2後		2			○							兼1	
			家庭科教育実践演習　－生活工学とＩＣＴ教育－	1･2前		2			○							兼1	
			英語科教育実践演習　－構文文法論－	1･2前		2			○							兼1	
			英語科教育実践演習　－イギリス文学論－	1･2前		2			○							兼1	
			英語科教育実践演習　－語彙指導－	1･2後		2			○							兼1	
			小計（52科目）	－		104			－		6	5	0			兼42	－

	教科研究開発高度化系コース共通	授業力熟達の理論と課題	1･2前		2			○		1						
		学校における道徳教育と道徳科	1･2後		2			○		1					兼1	オムニバス
		子どもの臨床心理学的アセスメントと支援	1･2前		2			○			1				兼1	オムニバス
		発達障害の特性と基本的対応	1･2後		2			○							兼3	オムニバス・共同（一部）
		教科内容構成論　－国語科－	1･2前		2			○							兼2	オムニバス
		教科内容構成論　－社会科－	1･2前		2			○							兼3	オムニバス
		教科内容構成論　－数学科－	1･2前		2			○							兼3	オムニバス
		教科内容構成論　－理科－	1･2前		2			○		1					兼3	オムニバス・共同（一部）
		教科内容構成論　－音楽科－	1･2前		2			○			1				兼5	オムニバス・共同（一部）
		教科内容構成論　－美術科－	1･2前		2			○			1				兼4	オムニバス
		教科内容構成論　－保健体育科－	1･2前		2			○							兼2	共同
		教科内容構成論　－技術科－	1･2前		2			○		1					兼4	オムニバス
		教科内容構成論　－家庭科－	1･2前		2			○		1					兼2	オムニバス
		教科内容構成論　－英語科－	1･2前		2			○		1					兼1	オムニバス
		教科内容教材論　－国語科－	1･2後		2			○							兼2	オムニバス・共同（一部）
		教科内容教材論　－社会科－	1･2後		2			○							兼4	オムニバス
		教科内容教材論　－数学科－	1･2後		2			○							兼1	
		教科内容教材論　－物理－	1･2後		2			○		1						
		教科内容教材論　－化学－	1･2後		2			○							兼2	オムニバス・共同（一部）
		教科内容教材論　－生物－	1･2後		2			○							兼3	共同
		教科内容教材論　－地学－	1･2後		2			○							兼1	
		教科内容教材論　－音楽科－	1･2後		2			○		1					兼5	オムニバス
		教科内容教材論　－美術科－	1･2後		2			○			1				兼4	オムニバス
		教科内容教材論　－保健体育科－	1･2後		2			○			1				兼1	オムニバス・共同（一部）
		教科内容教材論　－技術科－	1･2後		2			○		1					兼4	オムニバス
		教科内容教材論　－家庭科－	1･2後		2			○		1					兼2	オムニバス
		教科内容教材論　－英語科－	1･2後		2			○							兼3	オムニバス・共同（一部）
		小計（27科目）	－		54			－		7	4	0			兼49	－
		小計（94科目）	－		188			－		17	10	1			兼53	－
合計（139科目）			－		290			－		28	19	1			兼57	－

学位又は称号	教職修士（専門職）	学位又は学科の分野	教員養成関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
○卒業要件 修了要件単位数：４６単位　履修登録の上限：年間３４単位 ○履修方法 Ⅰ．学校臨床力高度化系　初任期教員養成コース １．共通科目（共通５領域）･･･各領域から以下のように必修（計８科目１６単位） (1)教育課程の編成及び実施に関する領域 「カリキュラムの開発と実践Ａ」１科目２単位必修 (2)教科等の実践的な指導方法に関する領域 「授業デザインとＩＣＴ活用Ａ」「教科指導実践演習Ａ」２科目４単位必修 (3)生徒指導及び教育相談に関する領域 「生徒指導・教育相談の理論と実践Ａ」１科目２単位必修 (4)学級経営及び学校経営に関する領域 「学級経営の実践と課題Ａ」「学校づくりと学校経営Ａ」２科目４単位必修 (5)学校教育と教員の在り方に関する領域 「現代社会と学校教育」「教員の職務と役割」２科目４単位必修 ２．教職専門実習 「学校臨床専門実習Ⅰ・Ⅱ」計１０単位必修 ３．コース必修科目 「初任期教員養成コース」指定の４科目８単位及び「学校臨床力高度化系コース共通」の２科目４単位（計６科目１２単位）を必修とする。 ４．コース選択科目 「初任期教員養成コース」指定の３科目６単位及び「学校臨床力高度化系コース共通」の４科目８単位から、４科目８単位以上を選択する。なお、他の系・コースに設けられた科目であっても履修することができるが、この場合、修了要件及び履修基準の単位数に含めることはできないものとする。 Ⅱ．学校臨床力高度化系　中核教員・リーダー教員養成コース １．共通科目（共通５領域）･･･各領域から以下のように必修（計８科目１６単位） (1)教育課程の編成及び実施に関する領域 「カリキュラムの開発と実践Ｂ」１科目２単位必修 (2)教科等の実践的な指導方法に関する領域 「授業デザインとＩＣＴ活用Ａ」「教科指導実践演習Ｂ」２科目４単位必修 (3)生徒指導及び教育相談に関する領域 「生徒指導・教育相談の理論と実践Ｂ」１科目２単位必修 (4)学級経営及び学校経営に関する領域 「学級経営の実践と課題Ｂ」「学校づくりと学校経営Ｂ」２科目４単位必修 (5)学校教育と教員の在り方に関する領域 「現代社会と学校教育」「教員の職務と役割」２科目４単位必修 ２．教職専門実習 「学校臨床専門実習Ⅰ・Ⅱ」計１０単位を必修とする。なお、教職経験６年以上の者については、その教職経験によって得られた教育実践上の課題に関するレポートを提出させ、教職専門実習を所掌する委員会及び教授会において審査を行った上で、「学校臨床専門実習Ⅰ」（３単位）を履修したとみなして、履修を免除する場合がある。 ３．コース必修科目 「中核教員・リーダー教員養成コース」指定の２科目４単位及び「学校臨床力高度化系コース共通」の２科目４単位（計４科目８単位）を必修とする。 ４．コース選択科目 「中核教員・リーダー教員養成コース」指定の６科目１２単位及び「学校臨床力高度化系コース共通」の４科目８単位から、６科目１２単位以上を選択する。なお、他の系・コースに設けられた科目であっても履修することができるが、この場合、修了要件及び履修基準の単位数に含めることはできないものとする。	１学年の学期区分	２期
	１学期の授業期間	１５週
	１時限の授業時間	９０分

Ⅲ．教科研究開発高度化系　人間発達探究コース １．共通科目（共通５領域）･･･各領域から以下のように必修（計８科目１６単位） (1)教育課程の編成及び実施に関する領域 「カリキュラムの開発と実践Ｃ」１科目２単位必修 (2)教科等の実践的な指導方法に関する領域 「授業デザインとＩＣＴ活用Ｃ」１科目２単位必修 「教科指導実践演習Ｃ」「保育内容指導法演習」のうち１科目２単位を選択必修 (3)生徒指導及び教育相談に関する領域 「生徒指導・教育相談の理論と実践Ｃ」１科目２単位必修 「生徒指導・教育相談実践演習」「幼児期の教育相談」のうち１科目２単位を選択必修 (4)学級経営及び学校経営に関する領域 「学級経営の実践と課題Ｃ」１科目２単位必修 「学校づくりと学校経営Ｃ」「幼児期におけるクラスづくりと園づくり」のうち１科目２単位を選択必修 (5)学校教育と教員の在り方に関する領域 「社会と学校教育・教員における現代的課題」１科目２単位必修 ２．教職専門実習 「教科研究専門実習Ⅰ・Ⅱ」計１０単位を必修とする。なお、教職経験６年以上の者については、その教職経験によって得られた教育実践上の課題に関するレポートを提出させ、教職専門実習を所掌する委員会及び教授会において審査を行った上で、「教科研究専門実習Ⅰ」（３単位）を履修したとみなして、履修を免除する場合がある。 ３．コース必修科目 「人間発達探究コース」指定の４科目８単位及び「教科研究開発高度化系コース共通」の３科目６単位（計７科目１４単位）を必修とする。 ４．コース選択科目 「人間発達探究コース」指定の２科目４単位及び「教科研究開発高度化系コース共通」の２７科目５４単位から、３科目６単位以上を選択する。なお、他の系・コースに設けられた科目であっても履修することができるが、この場合、修了要件及び履修基準の単位数に含めることはできないものとする。 Ⅳ．教科研究開発高度化系　教科学習探究コース １．共通科目（共通５領域）･･･各領域から以下のように必修（計８科目１６単位） (1)教育課程の編成及び実施に関する領域 「カリキュラムの開発と実践Ｃ」１科目２単位必修 (2)教科等の実践的な指導方法に関する領域 「授業デザインとＩＣＴ活用Ｃ」「教科指導実践演習Ｃ」２科目４単位必修 (3)生徒指導及び教育相談に関する領域 「生徒指導・教育相談の理論と実践Ｃ」「生徒指導・教育相談実践演習」２科目４単位必修 (4)学級経営及び学校経営に関する領域 「学級経営の実践と課題Ｃ」「学校づくりと学校経営Ｃ」２科目４単位必修 (5)学校教育と教員の在り方に関する領域 「社会と学校教育・教員における現代的課題」１科目２単位必修 ２．教職専門実習 「教科研究専門実習Ⅰ・Ⅱ」計１０単位を必修とする。なお、教職経験６年以上の者については、その教職経験によって得られた教育実践上の課題に関するレポートを提出させ、教職専門実習を所掌する委員会及び教授会において審査を行った上で、「教科研究専門実習Ⅰ」（３単位）を履修したとみなして、履修を免除する場合がある。 ３．コース必修科目 「教科学習探究コース」指定の２科目４単位及び「教科研究開発高度化系コース共通」の３科目６単位（計５科目１０単位）を必修とする。 ４．コース選択科目 「教科学習探究コース」指定の５２科目１０４単位及び「教科研究開発高度化系コース共通」の２７科目５４単位から、５科目１０単位以上を選択する。なお、他の系・コースに設けられた科目であっても履修することができるが、この場合、修了要件及び履修基準の単位数に含めることはできないものとする。	

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

（【既設】連合教職実践研究科 教職実践専攻）

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考	
共通必修科目		カリキュラム概論	1･2前	2			○			1	1				兼1	オムニバス
		カリキュラムの開発と実践Ａ	1･2後		2		○			2	1				兼1	共同
		カリキュラムの開発と実践Ｂ	1･2後		2		○								兼1	
		教科指導の理論と課題	1･2前	2			○				1	1			兼1	オムニバス
		教科指導実践演習Ａ	1･2前		2			○		3	3				兼1	共同
		教科指導実践演習Ｂ	1･2後		2			○			1	1				
		生徒指導の理論と実践	1･2前	2			○			1					兼2	オムニバス
		生徒指導実践演習	1･2後	2				○		2	3				兼1	オムニバス
		学校経営の実践と課題Ａ	1･2後		2		○				1				兼1	
		学校経営の実践と課題Ｂ	1･2前		2		○			1	1					
		学校づくりと学校経営Ａ	1･2後		2		○			1					兼1	
		学校づくりと学校経営Ｂ	1･2前		2		○			1					兼1	
		現代社会と学校教育	1･2前	2			○			1	2					共同
		教員の職務と役割	1･2後	2			○			1						
		小計（14科目）	－	12	16		－			7	7	1			兼8	－
教職専門実習		教職専門実習Ⅰ	1後		3				○	6	5	1			兼3	
		教職専門実習Ⅱ	2前		7				○	6	5	1			兼3	
		教職専門実習Ⅲ	1通		3				○	6	5	1			兼3	
		教職専門実習Ⅳ	2通		4				○	6	5	1			兼3	
		教職専門実習Ａ	1後	3					○	1						
		教職専門実習Ｂ	1通	3					○						兼1	
		教職専門実習Ｃ	2通	4					○						兼1	
		小計（7科目）	－	10	17		－			7	5	1			兼5	－
コース必修科目	授業力高度化コース	授業コミュニケーション論	1･2前	2			○				1	1				
		授業研究の理論と実践	1･2後	2			○				2					
		現代的教育課題の教材化と授業実践	1･2後	2			○			1	1					
		授業力高度化演習	1･2後	2				○		3	2				兼1	共同
		授業力高度化実践研究Ⅰ	1･2通	2				○		1	1	1			兼2	
		授業力高度化実践研究Ⅱ	2後	2				○		1	1	1			兼2	
	生徒指導力高度化コース	望ましい集団づくりの実践と課題	1･2前	2			○			2						
		児童生徒理解の理論と実践	1･2後	2			○				2					共同
		教育相談・特別支援演習	1･2前	2				○			1				兼1	
		生徒指導充実のための学校内外の連携	1･2後	2			○			1					兼1	共同
		生徒指導力高度化実践研究Ⅰ	1･2通	2				○		1	1				兼2	
		生徒指導力高度化実践研究Ⅱ	2後	2				○		1	1				兼2	
	学校経営力高度化コース	教育改革と教育行政・学校経営	1･2前	2			○			1						
		教育法規の適用と課題	1･2後	2			○			1						
		学校づくりとリーダーシップ	1･2前	2			○								兼1	
		学校組織改善の理論と手法	1･2前	2			○								兼1	
		学校の危機管理	1･2後	2			○								兼1	
		学校経営力高度化実践研究	1･2通	2				○		1					兼2	
		小計（18科目）	－	36			－			7	7	1			兼6	－

選択科目	社会認識を培う授業の実践	1･2後		2		○								兼1	
	量的アプローチ授業分析研究	1･2後		2		○				1					
	情報機器操作法	1･2前		2		○				1					
	教育実践記録の国際比較	1･2後		2		○				1					
	問題行動改善のための事例研究	1･2前		2		○			1						
	人格理解のための理論と臨床技法	1･2前		2		○								兼1	
	教員の意識と組織行動	1･2前		2		○								兼1	
	地球・生命・環境と人間	1･2後		2		○								兼1	
	現代の学校と共生教育	1･2後		2		○								兼1	
	教育行政・学校経営改善実践演習	1･2前		2			○		1						
	学校事務と学校財務	1･2後		2		○			1						
	授業力熟達の理論と実践	1･2後		2		○								兼1	隔年
	スクールアイデンティティの形成と教員の役割	1･2前		2		○								兼1	
	学校の魅力化と地域との連携	1･2後		2		○								兼1	
	インクルーシブ教育システムと特別支援教育	1･2後		2		○			1						
	学校における心理教育	1･2後		2		○				2					
	小学校英語実践演習	1･2後		2			○							兼1	
	ICTを活用した教育方法の実践と課題	1･2後		2			○				1				
	「問い」から考える教育学	1･2前		2		○								兼1	隔年
	学級づくりの歴史と現在	1･2前		2		○								兼1	隔年
	平和教育論	1･2後		2		○								兼1	隔年
	人権教育の課題と模索	1･2後		2		○								兼1	隔年
	教育評価について考える	1･2後		2		○								兼1	隔年
	教師の成長について考える	1･2後		2		○								兼1	隔年
	子どもと表現について考える	1･2前		2		○								兼1	隔年
	認知発達と教育的支援	1･2後		2		○								兼1	隔年
	学校カウンセリングの理論と実際	1･2前		2		○								兼3	隔年 オムニバス
	幼小接続について考える	1･2前		2		○								兼1	隔年
	学校という組織を考える	1･2後		2		○								兼1	隔年
	保育の専門性について考える	1･2前		2		○								兼1	隔年
	小計（30科目）	－		60		－			3	4	1			兼20	－
合計（69科目）		－	58	93		－			8	8	1			兼24	－

学位又は称号	教職修士（専門職）	学位又は学科の分野	教員養成関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
○卒業要件 修了要件単位数：４６単位　履修登録の上限：年間３４単位 ○履修方法 １．共通必修科目 １０科目２０単位を修得すること。 ２．教職専門実習 １０単位を修得すること。なお、教職経験を有する者については、その教職経験によって得られた教育実践上の課題に関するレポートを提出させ、教職専門実習を所掌する委員会及び教授会において審査を行った上で、下記の単位を履修したとみなして、履修を免除する場合がある。 ３．コース必修科目 所属するコースの科目について、６科目１２単位を修得すること。 ４．選択科目 ２科目４単位を修得すること。	１学年の学期区分	２期
	１学期の授業期間	１５週
	１時限の授業時間	９０分

別記様式第２号（その３の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（連合教職実践研究科　教職実践専攻）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通科目	(1) 教育課程の編成・実施に関する領域	カリキュラムの開発と実践Ａ	本科目では各教科の単元計画を構想する。単元目標を達成するために各授業をどのように関連させて単元を構想するのかを学ぶ。また、ミドルリーダーとして各校の研究主任を担った場合に、各校のカリキュラムマネージメントができるように、現代的なテーマの「カリキュラム開発と運営の実際」を学ぶ。ＦＷは先進的なカリキュラムを開発している小中学校において、その開発の方法と運営について実践的に学ぶ。 カリキュラム開発と運営の実際、カリキュラム全体における授業の役割を省察し、各教科の単元を構成し、授業を効果的に位置づけることができ、現代的なテーマのカリキュラムを構想することができることを到達目標とする。	
		カリキュラムの開発と実践Ｂ	本科目では各教科の単元計画を構想する。単元目標を達成するために各授業をどのように関連させて単元を構想するのかを学ぶ。また、これまでの現場での経験を踏まえて、各校のカリキュラムマネージメントができるように、現代的なテーマの「カリキュラム開発と運営の実際」を学ぶ。ＦＷは先進的なカリキュラムを開発している小中学校において、その開発の方法と運営について実践的に学ぶ。 カリキュラム開発と運営の実際、これまでの実践の省察する。各教科の単元を構成し、授業を効果的に位置づけることができ、現代的なテーマのカリキュラムを構想することができることを到達目標とする。	
		カリキュラムの開発と実践Ｃ	（概要）　各教科等の単元計画を構想する際、単元目標を達成するために各授業をどのように関連させて単元をつくるのかを学ぶ。また、ミドルリーダーとして各学校の研究主任を担った場合に、学校全体を視野に入れたカリキュラム・マネジメントができるように、現代的なテーマに関するカリキュラムの開発と運営の実際についても学ぶ。その際、幼小接続の考え方についても検討する。 カリキュラム開発と運営の実際、これまでの実践を省察する。各教科の単元を構成し、授業を効果的に位置づけることができ、現代的なテーマのカリキュラムを構想することができることを到達目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （21　樋口とみ子・43　樋口万太郎（実務家教員）・37　市田克利（実務家教員）／13回） 第1回においてイントロダクションを実施し、授業の計画等について説明し、最近の「資質・能力にもとづくカリキュラム改革」の特徴について検討する。 第2回から第6回まで、小学校及び中学校の各教科における単元構想について事例研究を行う。第7回から第9回まで、資質能力にもとづくカリキュラム改革における単元構想とその意義と課題について論じる。第12回から第14回まで、地域の課題をテーマとした「総合的な学習の時間」のカリキュラム、国際理解・グローバル教育をテーマとしたカリキュラム改革、プログラミング的思考を取り入れたカリキュラムについて、具体的な実践を検討する。第15回では、事例研究などをもとに、特色あるカリキュラム開発の意義と課題について考える。 （12　古賀松香・43　樋口万太郎（実務家教員）・37　市田克利（実務家教員）／2回） 第10回及び第11回において、幼小接続のあり方について、基本的な考え方、具体的な実践を論じる。	オムニバス方式・共同

	(2) 教科等の実践的な指導方法に関する領域	授業デザインとＩＣＴ活用Ａ	（概要）　教育におけるＩＣＴ活用の在り方を、教育方法学の様々な概念装置を活用して捉え直し、本当の意味でＩＣＴを使いこなすために必要な指導力について検討する。具体的には、教育方法学の基礎概念を必要に応じて振り返りつつ、ＩＣＴを使った教育方法の実践事例・言説に対する批判的分析や、実際に使ってみたうえでの省察を行う。また、到達目標を下記のとおり設定する。 １．ＩＣＴを使った教育方法の動向を総合的に説明することができる。 ２．教育方法学的な観点から、教育実践におけるＩＣＴ活用の在り方について自分なりに説得力をもって主張することができる。 ３．ＩＣＴを適切かつ的確に活用した授業を構想し、実践することができる。 （オムニバス方式／全15回） （33　福嶋祐貴・104 青砥弘幸／2回）（共同） 第1回においてイントロダクションを行い、ＩＣＴをめぐる歴史と現状・課題を把握する。第15回において、学修の成果を総括する。 （33　福嶋祐貴／9回） 第2回から第10回まで、教科内容の理解を深めるＩＣＴ活用、デジタル教科書の長所・短所、初等中等教育におけるプログラミング教育、情報リテラシー。ＩＣＴを活用した協調教育、ＩＣＴを用いた学修評価と学びの蓄積、遠隔授業の言語的、非言語的コミュニケーション、ＩＣＴ活用の質と平等、ＩＣＴを用いた遠隔での学習環境について論じ、教育におけるＩＣＴ活用の在り方を教育方法学の観点から捉える。 （104 青砥弘幸／4回） 第11回から第14回まで、教科学習の授業デザインの観点から、ＩＣＴを活用した新しい学びを進めるための教科学習について論じる。	オムニバス方式・共同（一部）
		授業デザインとＩＣＴ活用Ｃ	（概要）　まず担当者がそれぞれの視点から幼児教育から高等学校教育においてＩＣＴを利用することの意義や課題について述べる。次に、授業における特色あるＩＣＴ活用の実践を行っている京都府市の小中学校（いずれかの対象校1校）を訪問し、授業参観及び担当教員へのインタビューを行い、授業における特色あるＩＣＴ活用の実践方法、課題等について理解を深める。そして数人のグループに分かれて、ＩＣＴを活用した授業をデザインする演習を通して、ＩＣＴを活用した授業づくりのための授業(保育)デザイン力を高める。到達目標は下記のとおりである。 ・ＩＣＴを活用した授業の意義や課題を理解する。 ・ＩＣＴを活用した授業づくりのための授業(保育)デザイン力を高める。 （オムニバス方式／全15回） （7　徳岡慶一・43　樋口万太郎（実務家教員）・47　岡本幹（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／6回）（共同） 第1回ではオリエンテーションとして授業の概要と授業計画を提示し、授業の具体的イメージを受講生が共有できるようにする。第3回ではデジタル教科書等を用いた小中高におけるＩＣＴ教育活用の意義と課題を論じる。第6回から第9回にわたりＩＣＴを活用する学校でフィールドワークを実施する。 （12　古賀松香・43　樋口万太郎（実務家教員）・47　岡本幹（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／1回）（共同） 第2回で、幼児教育におけるＩＣＴ活用を論じる。 （16　黒田恭史・43　樋口万太郎（実務家教員）・47　岡本幹（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／1回）（共同） 第4回で、個別支援（不登校、外国人の子ども、院内学級など）を必要とする子どもへのＩＣＴ教育活用の意義を論じる。 （17　谷口和成・43　樋口万太郎（実務家教員）・47　岡本幹（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／1回）（共同） 第5回で、アクティブ・ラーニングを支援する授業におけるＩＣＴ教育活用の意義を論じる。 （16　黒田恭史・17　谷口和成・43　樋口万太郎（実務家教員）・47　岡本幹（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／6回）（共同） 第10回から第14回まで、ＩＣＴを活用した授業デザインについて、演習として、単元構成、授業構成、グループによるプレゼンテーションに取り組む。第15回に、授業のまとめと振り返りを行う。	オムニバス方式・共同
		教科指導実践演習Ａ	実務家教員が「教科における授業づくりの手順とポイント」及び「模擬授業」について説明を行う。この説明をもとに受講生は「授業の指導計画と教材研究、学習指導案づくり」を行い、「模擬授業」を実施し自身の課題の発見と修正をおこなう。続いて校種（小・中）別にフィールドワークを実施する。フィールドワークでは、教科の授業を中心に参観し、授業目標・内容・方法などを観察する。その上で、受講生は再度「模擬授業」を実施する。第2回目の模擬授業では課題を修正しよりよい授業をおこなうことが求められる。最後にグループワーク・全体討論などをおこない、自身の教科指導力を高める。 到達目標としては、①教科における授業作りの手順とポイントを習得し、フィールドワークでの授業について理論的に分析できる。②教科の目標に則した学習指導計画を作成し模擬授業を行い、省察を行うことができる。また、模擬授業で発見した課題を修正した授業改善案を作成するとともに再度模擬授業を実施し、自身の教科指導をたかめることができることを挙げる。 （23　徳永俊太・104 青砥弘幸・6　船田智史・34　佐古清（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同

		教科指導実践演習Ｂ	自身の授業実践上の課題や校内の授業改善の課題について、フィールドワークや模擬授業・グループワークにより課題解決の方策を探る。フィールドワークは、言語活動の充実・共同的な学習・通常学級における特別支援など、授業改善のポイントとされる課題について研究を進めている学校を予定している。フィールドワークでの学びを生かし、「模擬授業」を行い、グループワーク・全体討論により自身の「授業改善案」を作成する。 それぞれが持つ授業論に対する省察を行い、①フィールドワーク校の研究課題・理論・実践について整理することができる。②改善の視点を定めた模擬授業を行い、省察を行うことができる。③自身の授業実践上の課題や校内の授業改善の課題を明らかにし、理論に基づいた改善案を作成することができる、ことを到達目標とする。	
		教科指導実践演習Ｃ	理系・文系・芸体系研究者教員が「教科における授業づくりの方法とポイント」および「模擬授業」について説明を行う。この説明をもとに受講生は「授業の指導計画と教材開発・研究、学習指導案づくり」を行い、「模擬授業」を実施し自身の課題の発見と修正をおこなう。続いて校種（小・中・高）別にフィールドワークを実施する。フィールドワークでは、教科の授業を中心に参観し、授業目標・内容・方法などを観察する。その上で、受講生は再度「模擬授業」を実施する。最後にグループワーク・全体討論などを行い、自身の教科指導力を高める。なお、到達目標は下記のである。 ・教科における授業作りの方法とポイントを習得し、フィールドワークでの授業について教科内容・教科教育の両面について理論的方法で分析できる。 ・教科の目標に則した学習指導計画を作成し模擬授業を行い、省察を行うことができる。また、模擬授業で発見した課題を修正した授業改善案を作成するとともに再度模擬授業を実施し、自身の教科指導力を高めることができる。 （28　寺田守・90　小松崎敏・45　藤田智之（実務家教員）・46　野ヶ山康弘（実務家教員）・37　市田克利（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
		保育内容指導法演習	（概要）　領域「表現」「言葉」を中心に具体的な指導場面を想定した教材研究を行い、幼児の音楽的・言語的発達の特性をふまえた環境構成と援助のあり方を理解する。ロールプレイやグループディスカッションを通して、幼児の主体的な表現を引き出す指導技術を習得する。国内外の先進的な保育実践について映像教材等から学び、わが国における実践上の問題点などに関してディスカッションを行う。 ①幼児の多様な表現を引き出し、主体的な表現活動を保証する環境構成および教材開発の方法を理解するとともに、指導に生かす技術を身につける。②幼児期の音楽的・言語的表現の発達をふまえた、遊びとしての指導のあり方を理解する。③主体的・対話的で深い学びを実現するための保育方法や保育内容を具体的に構想することができることを到達目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （11　平井恭子・74　東村知子・42　高野史朗（実務家教員）／1回）（共同） 第1回で、オリエンテーションとして、授業の概要及び到達目標について説明する。 （11　平井恭子・42　高野史朗（実務家教員）／7回） 第2回から第8回まで、私たちの生活と音楽のかかわり、さまざまな楽器の活用をとりあげ、幼児の音楽表現と指導法について、説明する。 （74　東村知子・42　高野史朗（実務家教員）／7回） 第9回から第15回まで、乳幼児のことばの発達、児童文化財の活用を取り上げ、子どもの言葉を豊かにする保育実践と指導法について考える。	オムニバス方式・共同
	(3) 生徒指導、教育相談に関する領域	生徒指導・教育相談の理論と実践Ａ	広義の生徒指導のあり方について学ぶ。非行や体罰、いじめ等についてその基本的な考え方、個別指導、集団指導、学級・学年・学校経営、学習や授業との関連、学校内外の連携やチームによる支援、また特別支援教育とのかかわりなど、今日的な生徒指導上の具体的な課題について、教育学の知見をベースに、総合的な生徒指導力を身につけることを目指す。 到達目標は以下のとおりである。 １．教員にとって生徒指導・教育相談とはどのような職務であるかを知る。 ２．すべての児童生徒を対象に育む生徒指導のあり方について理解する（集団指導）。 ３．問題行動と特別支援教育とをかかわらせながら、個に応じた指導の重要性について理解する（個別指導）。 ４．学年主任や生徒指導主事が行う生徒指導の役割について理解する。 ５．生徒指導事案のメディア対応について理解する。	

		生徒指導・教育相談の理論と実践Ｂ	非行や体罰、いじめ等の対応について、学級経営・学年経営・学校経営の視点から、これまでの自身の経験を振り返る。さらに、特別支援教育の考え方をふまえたチームによる支援や学校内外との連携など、刻々と変わる新たな生徒指導に関する考え方についても学ぶ。ミドルリーダー・管理職として、自分の勤務する学校の生徒指導体制を再確認しながら、今後に向けて生徒指導計画案を検討するなどして、総合的な生徒指導力の向上を目指す。 到達目標は下記のとおりである。 １．生徒指導・教育相談とはどのような職務であるかを振り返りながら確認する。 ２．すべての児童生徒を育む生徒指導のあり方について振り、新たな知識を得る（集団指導）。 ３．具体的な問題行動や問題行動と特別支援とのかかわりについて振り返り、 新たな知見を得る（個別指導）。 ４．生徒指導主事や管理職が生徒指導で果たす役割と責任について理解し、新たな知見を得る。 ５．生徒指導主事等ミドルリーダーとして、あるいは管理職として自分が勤務するであろう学校を想定し、生徒指導体制案を作成する。 （25　網谷綾香・39　新谷幸三（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
		生徒指導・教育相談の理論と実践Ｃ	（概要）　現代学校教育における生徒指導・進路指導・教育相談及び特別支援教育についての基本的な理論と課題を学ぶ。対象となる課題として、いじめや不登校への理解と対応、特別支援教育との連携、児童相談所など学校内外との連携、チームによる支援、カウンセリング・マインド、また保護者への支援などを想定し、学校や教員としての関わり方を考えていく。 到達目標は下記のとおりである。 ・生徒指導・進路指導・教育相談及び特別支援教育の意義と役割について理解する。 ・不登校やいじめ、発達障害等の教育課題への理解と対応について学ぶ。 ・チームによる支援や関係機関・保護者との連携の必要性とあり方について理解する。 ・カウンセリングの基礎的な知識と技法を身に付ける。 （オムニバス方式／全15回） （27　西村佐彩子・44　秋山雅文（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／10回）（共同） 第1回から第5回まで、生徒指導・進路指導の意義と役割に関して、生徒指導上の課題への理解と対応、進路指導とキャリア教育の実際について、論じる。 第6回から第10回まで、教育相談の意義と役割に関して、カウンセリングの理論と技法を紹介し、児童生徒の相談、保護者への支援についてカウンセリング実習を行う。 （78　佐藤美幸・44　秋山雅文（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／2回）（共同） 第11回から第12回まで、発達障害への理解と対応、特別な支援が必要な子どもと保護者支援について論じる。 （22　相澤雅文・44　秋山雅文（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／3回）（共同） 第13回から第15回まで、知的障害への特性理解と対応・支援の在り方、特別支援教育と教育課題との関連（いじめ、不登校等）、特別支援教育と学校コンサルテーションについて論じる。	オムニバス方式・共同
		生徒指導・教育相談実践演習	『生徒指導・教育相談の理論と実践』で学んだ基礎的な内容を事例に基づいて演習を行い、理論的な知見を学校現場などで実践的に活用できるように探究を深めていく。また演習を通して、事例の検討、ロールプレイ、グループディスカッション、フィールドワークなどの主体的学習を重視し、生徒指導や子ども理解・支援の方法について能動的・積極的に考える姿勢、互いの考えをグループで共有し展開していくコミュニケーション能力の醸成も目指す。 到達目標は、下記のとおりである。 ・生徒指導・教育相談上の諸課題への理解とアプローチについて実践的に学ぶ。 ・学校カウンセリングの基本的態度と方法を身に付けて、教育相談に生かすことができるようになる。 ・不登校支援の関係機関の持つ役割についてイメージできる。 （27　西村佐彩子・46　野ヶ山康弘（実務家教員）・48　北岡淳子（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同

		幼児期の教育相談	この授業では、育児・保育の現場が抱える諸問題を理解し、現場での支援の理論的かつ具体的方法について学び、育児現場、保育現場それぞれにおける教育相談のあり方と展開について理解を深めることを目的とする。授業内容は受講生のニーズも取り入れ、オリエンテーション時に協議して決定する。なお、到達目標は下記のとおりである。 ・育児・保育現場の今日的課題について理解する。 ・乳幼児期の発達支援において求められる専門性について理解する。 ・乳幼児期の子どもと保護者の支援について、支援のあり方と展開について、実際に即して理解する。 （75　佐川早季子・48　北岡淳子（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
	(4) 学級経営、学校経営に関する領域	学級経営の実践と課題Ａ	本授業は学級経営に関する共通科目である。共通科目は学部新卒生と現職教員の院生の混成クラスが原則ではあるが、両者のレィディネスと到達目標に大きな違いがあるため、本授業は学部卒院生のみのクラスとし、基本的な学級経営について学ぶこととする。学級経営とは学級における教育の全領域を通して行われる核となる機能であり、教員・児童生徒・保護者の複雑な相互作用の中で展開される。そのため、断片化した技術ではなく、文脈依存的な力量が必要であり、根本的な見方や考え方を身につける必要がある。したがって、授業では理論的な考え方や事例の検討、ロールプレイ、学校でのフィールドワークなどを通して、学級経営について具体的なイメージを持ち、自分なりの見方・考え方を身につけることを目指す。 到達目標は、下記のとおりである。 1. 学級経営について具体的にイメージができる。 2. 学級経営についての考え方や指導の仕方を身につけている。 3. 自分なりの学級経営観をふまえて、年度当初の学級経営案を作成することができる。	
		学級経営の実践と課題Ｂ	本授業は学級経営に関する共通科目である。共通科目は学部新卒生と現職教員の院生の混成クラスが原則ではあるが、両者のレィディネスと到達目標に大きな違いがあるため、本授業は現職教員のみのクラスとし、若手教員の育成や学年経営・学校経営の観点から学級経営を取り上げることとする。本授業では理論と実践との架橋という観点から大きく３つの内容から構成する。１つめは学級経営の今日的課題に関すること、２つめは理論を踏まえた若手教員や初任者教員への支援のあり方、３つめは校内体制の見直しに関することである。最後の時間に勤務校の学級経営体制を練り直して作成したレポートを発表し合う。 到達目標は、下記のとおりである。 １．ミドルリーダーの立場から若手教員の学級経営能力を高める指導・支援のための諸要件と指導・支援のあり方を、フィールドワークや事例研究を行いながら、分析・整理することができる。 ２．学校経営・学年経営の視点から学級経営のあり方を再検討し、自分なりに学級経営に関する校内体制のあり方を提案することができる。	
		学級経営の実践と課題Ｃ	本授業は学級経営に関する共通科目である。学級経営とは文字通り学級の経営だが、この言葉の不思議さは、経営の主体と対象が何かが必ずしも明らかではないことである。児童生徒は学級経営の主体か対象か、学級担任教員はいかなる立ち位置にあるのか。こうした学級という場の不思議さを見つめるとともに、そこで教員に求められる認知・判断・行為に関わる態度や力量の基礎として、広い視野を得ること及び多面的な状況理解ができることが目標である。そして、授業では基本用語の論理的検討のほか、資料映像の視聴、ロールプレイなどを通して、学級経営について複数のイメージを持てるようになること、教育実践上の多様な方略を持てるようになることを目指す。 到達目標は下記のとおりである。 1. 学級経営について複数のイメージを持てるようになる。 2. 学級経営に関する基本的な論理と行為について理解している。 3. 自身の学級経営観にもとづき、年度当初の学級経営案を作成することができる。 （8　榊原禎宏・45　藤田智之（実務家教員）・44　秋山雅文（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
		学校づくりと学校経営Ａ	学校における教育関係に関する省察を行うための知識基盤の形成を目指して、学校教育の歴史、制度、実態について学習し、学校観の更新を図るとともに今日の学校経営の課題と教師の役割についての理解を深める。 授業のテーマは「公教育としての学校教育の課題と教員の役割」である。到達目標は次のとおりである。 1.公教育制度としての学校の構造的特徴について理解する。 2.現代社会における学校教育の課題について説明できるようになる。 3.現代的な学校教育の課題を解決するための学校のガバナンスとマネジメントの在り方及びそこにおける教員の役割を理解し、適切な組織行動がとれるようになる。 （102 水本徳明・40　上山義宏（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同

		学校づくりと学校経営Ｂ	自律的な学校経営を行うための教育課程の編成方法について、先進事例の分析をもとにカリキュラムマップの作成などを通して教育課程編成を行う実践力を身に付ける。 授業のテーマは「自律的な学校経営と教育課程改善」である。到達目標は次のとおりである。 1.自律的学校経営の要件について理解する。 2.先進事例の特徴を分析し、そこから自校の改善についてアイディアを獲得できるようになる。 3.勤務校の教育課題を分析し、その解決のための効果的な教育課程改善およびその実現のための自己のリーダー行動を構想できるようになる。 （３　河野和清・40　上山義宏（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
		学校づくりと学校経営Ｃ	学校教育に教員として携わる上で求められる、学校教育の理念、制度、実態に関する基礎的理解を深めるとともに、自身の学校観と教育観の揺らぎと更新を図ることのできる、学校教育の批判的考察と分析上の力量の基盤を築くことを目指す。 到達目標は下記のとおりである。 １．学校の存立と運営に関わるマクロレベル・メゾレベル・ミクロレベルの事項について理解している。 ２．学校づくりの具体的な領域とその課題について説明ができる。 （８　榊原禎宏・36　中垣ますみ（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
		幼児期におけるクラスづくりと園づくり	乳幼児期の教育における集団生活と保育者の役割を理解した実践ができるようになるために、乳幼児期における個と集団の育ちの特徴を理解する。その上で、年間指導計画や実践についてクラスづくりに関する課題の分析・評価を行い、改善の方策について考える。また、家庭や地域社会と連携した質の高い幼児期の教育の展開として、社会に開かれた幼児教育について実践事例を通して学ぶ。 到達目標は下記のとおりである。 1. 幼児期の教育における集団とその教育的意義について理解している。 2. 年間指導計画と実践について、クラスづくりを視点とした分析・評価を行うことができる。 3. 社会に開かれた教育課程の理念を実践する方策を提案することができる。 （12　古賀松香・42　高野史朗（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
	(5) 学校教育と教員の在り方に関する領域	現代社会と学校教育	（概要）　多種多様な問題を生み出し、それへの対応や解決の道筋が不透明になっている今日の学校教育のあり方について、公教育・学校教育の本質的な認識や社会変化によるその課題を整理するとともに、さまざまな問題現象に関するディスカッション、対話を通じて理解を深めていく。 現代社会における学校教育のあり方を考えることをテーマとし、到達目標は下記のとおりである。 １．現在に至る社会の変化の中で、公教育の担ってきた役割を理解することを通じて、社会構造の変化の本質に関して考えることができる。 ２．社会構造の変化の本質を踏まえながら、今日の学校教育に関わる諸問題の背景、文脈を読み解き、その本質について考えることができる。 ３．授業の中で、学校教育の諸問題を考える中で、対話を重ね、協議を通じて、問題を深めることができる （1 竺沙知章・23 徳永俊太・24 安達知郎）全回を共同して担当する。	共同
		教員の職務と役割	公教育制度における教員の職務と役割について、その法制度に関する理解を深め、専門職としての教員の社会的責任、法的責任について考察する。特に、教員の職業倫理について考察し、理解を深めること、裁判となり、法的責任をめぐって争われた事例について検討することにより、論理的思考力、判断力を養うこと、教員の資質向上について検討し、どのような教員を目指すか自ら目指す教員像について考察するものである。 公教育制度における教員の職務と役割について、法的責任を中心に理解を深めることをテーマとする。到達目標は下記のとおりである。 1.教員の法的責任、教員が置かれた制度上の位置づけについて的確に理解すること。 2.個人の自由と公共性との関係について深く考察することができること。 3.子どもとの関係における教員の法的責任について、事例に即して考えることできること。 4.教員をめぐる今日的問題状況について、その背景、問題の本質について考えることができること。 5.教員の資質能力についての認識を深め、自ら目指す教員像について、深く考えることができること。 （１　竺沙知章・34　佐古清（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同

		社会と学校教育・教員における現代的課題	人権教育、グローバル教育、共生教育等の理念について学ぶ。具体的には、子どもの生活・社会的背景の多様性や差別について理解したうえで、子どもの貧困、虐待、外国人児童生徒等、学校教育が直面する現状と課題について深く分析し、教員としての関わり方を考える。 到達目標は下記のとおりである。 1.学校教育や教員をめぐる現代的な課題について関心をもち、その解決に向き合うことができる。 2.学校教育や教員をめぐる現代的な課題について、理念や情報を元に、現状を分析することができる。 3.他者と考えを交流しながら現代的課題への教員としての関わりについて構想することができる。 （オムニバス方式／全15回） （50　濵田麻里・77　丸山啓史・47　岡本幹（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／3回）（共同） 第1回でオリエンテーションとして授業の概要と到達目標について説明する。また、第2回でイントロダクションとして公教育における教員の役割について論じる。第15回では、授業のまとめを行う。 （77　丸山啓史・47　岡本幹（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／6回）（共同） 第3回から第5回まで、人権教育をめぐる諸課題について取り上げる。また、第12回から第14回まで、教育における格差をめぐる諸課題について取り上げる。 （50　濵田麻里・47　岡本幹（実務家教員）・38　佐藤卓也（実務家教員）／6回）（共同） 第6回から第8回まで、グローバル教育をめぐる諸課題について取り上げる。また、第9回から第11回まで、外国人児童生徒等教育をめぐる諸課題について取り上げる。	オムニバス方式・共同
教職専門実習		学校臨床専門実習Ⅰ	１年次において、実習等を通して、学校が抱えている教育課題の理解を深めること、職務遂行能力の基礎を養うこと、大学院での講義、演習などで得た知見を基に、実習における経験を省察し、その背景、文脈を読み解くことをテーマとする。 到達目標は下記のとおりである。 1.教員として必要な職務遂行能力を身につけること。 2.学校の教育課題について理解を深めること。 3.学校の教育課題、実習での経験を省察し、その文脈を読み解く力量を身につけること。 （1 竺沙知章・2 片山紀子・3 河野和清・4 児玉祥一・5 谷川至孝・6 船田智史・ 23 徳永俊太・24 安達知郎・25 網谷綾香・33 福嶋祐貴・34 佐古清（実務家教員）・35 佐伯卓也（実務家教員）・39 新谷幸三（実務家教員）・40 上山義宏（実務家教員）・41 永尾彰子（実務家教員）・102 水本徳明・103 角田豊・104 青砥弘幸・105 森口洋一） 共同して担当する。	共同
		学校臨床専門実習Ⅱ	２年次において、実習等を通して、指導力の向上を図るとともに、学校の教育課題の改善に向けた校内研究など、学校における組織的な業務を遂行する力量を身につけること、児童生徒の様子など学校における様々な状況の文脈を読み解き、その改善に向けた取り組みを推進する力量を身につけることをテーマとする。到達目標は下記のとおりである。 （１）教員として必要な職務遂行能力の向上を図ること。 （２）学校の教育課題の文脈を読み解き、問題を探索する力量を身につけること。 （３）学校の教育課題に関する校内研究に関与し、その改善を図る力量を身につけること。 （1 竺沙知章・2 片山紀子・3 河野和清・4 児玉祥一・5 谷川至孝・6 船田智史・ 23 徳永俊太・24 安達知郎・25 網谷綾香・33 福嶋祐貴・34 佐古清（実務家教員）・35 佐伯卓也（実務家教員）・39 新谷幸三（実務家教員）・40 上山義宏（実務家教員）・41 永尾彰子（実務家教員）・102 水本徳明・103 角田豊・104 青砥弘幸・105 森口洋一） 共同して担当する。	共同

			教科研究専門実習Ⅰ	連携協力校の担当指導教員から、学級担任の職務や校務分掌について指導を受けながら教科の授業（保育）を中心に実習を行い、自らの実践的指導（保育）力の課題を明らかにすることを目指す。 また、研究者教員と実務家教員の協働により、幼児・児童・生徒を深く理解する力、幼児・児童・生徒が深い学びを実現できるように授業（保育）を適切にデザインする力、自らの実践を省察し、実践を探究する等の実践的指導力を育成する。その際、大学院における学びと学校現場での学びを相互に行き来して、理論から実践を読み解き、実践から理論を振り返る。 （7 徳岡慶一・8 榊原禎宏・9 相澤伸幸・10 佐藤克敏・11 平井恭子・12 古賀松香・13 平石隆敏・14 植山俊宏・15 西本有逸・16 黒田恭史・17 谷口和成・18 原田信一・19 井上えり子・20 清村百合子・21 樋口とみ子・22 相澤雅文・26 田爪宏二・27 西村佐彩子・28 寺田守・29 小山宏之・30 樫下達也・31 山内朋樹・32 中村翼・36 中垣ますみ（実務家教員）・37 市田克利（実務家教員）・38 佐藤卓也（実務家教員）・42 高野史朗（実務家教員）・43 樋口万太郎（実務家教員）・44 秋山雅文（実務家教員）・45 藤田智之（実務家教員）・46 野ヶ山康弘（実務家教員）・47 岡本幹（実務家教員）・48 北岡淳子（実務家教員）） 共同して担当する。	共同
			教科研究専門実習Ⅱ	１年次の教科研究専門実習Ⅰを基盤としつつ、大学院における学びによってこれまでに修得した専門知識や理論を、担当指導教員から実習に関する指導を受けながら実習を通してより実践的なものにし、授業力（保育力）を中心とした自らの実践的指導（保育）力のより一層の向上を目指す。 また、研究者教員と実務家教員の協働により、幼児・児童・生徒をより深く理解する力、幼児・児童・生徒が深い学びを実現できるように授業（保育）をより適切にデザインする力、自らの実践をより深く省察し、実践を探究する等の実践的指導力のより一層の育成を目指す。 （7 徳岡慶一・8 榊原禎宏・9 相澤伸幸・10 佐藤克敏・11 平井恭子・12 古賀松香・13 平石隆敏・14 植山俊宏・15 西本有逸・16 黒田恭史・17 谷口和成・18 原田信一・19 井上えり子・20 清村百合子・21 樋口とみ子・22 相澤雅文・26 田爪宏二・27 西村佐彩子・28 寺田守・29 小山宏之・30 樫下達也・31 山内朋樹・32 中村翼・36 中垣ますみ（実務家教員）・37 市田克利（実務家教員）・38 佐藤卓也（実務家教員）・42 高野史朗（実務家教員）・43 樋口万太郎（実務家教員）・44 秋山雅文（実務家教員）・45 藤田智之（実務家教員）・46 野ヶ山康弘（実務家教員）・47 岡本幹（実務家教員）・48 北岡淳子（実務家教員）） 共同して担当する。	共同
コース必修科目	学校臨床力高度化系	初任期教員養成コース	特別支援教育の理論と実践	通常の学級においても、特別支援教育の実践が求められている。この科目では、特別支援教育の理念・仕組みについての理解を深めながら、障害のある子どもを視野に入れた授業づくり、合理的配慮の考え方と進め方、教職員間および専門職間の連携のあり方などについて学ぶ。到達目標は下記のとおりである。 1.特別支援教育の理念・仕組み・教育課程等について理解することができる。 2.特別支援教育における連携・協力の重要性について理解することができる。 3.特別支援教育の現状や実際の取組みについて理解することができる。 ※学校臨床力高度化系の初任期教員養成コース、教科研究開発高度化系の人間発達探究コースで、クラス分けを行う。 （オムニバス方式／全15回） （10　佐藤克敏／5回） 第1回ではオリエンテーションとして、授業の概要や進め方等について確認する。第2回から第5回にかけて、特別支援教育の理念、ICFと障害理解、障害の理解と対応、インクルーシブ教育システムと特別支援教育支援体制について論じる。 （77　丸山啓史／5回） 第6回から第10回にかけて、諸外国におけるインクルーシブ教育の取り組み、保護者や福祉機関等との連携協力、障害のある子どもの教育の歴史、特別支援教育の教育課程の変遷、特別な教育的ニーズに基づく対応について論じる。 （22　相澤雅文／5回） 第11回から第15回にかけて、通常の学級における特別支援教育と配慮の実際、通級による指導における教育の実際、特別支援学級・学校における教育課程、特別支援教育における自立活動、及び授業のまとめと、特別支援教育の現状と課題を整理する。	オムニバス方式
			現代的教育課題の教材化と授業実践	2年次後期に位置づくこの授業では、大学での学びを授業、授業外に分けてすべて省察し、それらを関連付けることで総括し、その上でそれを活用して、授業を構想することを求める。言い換えれば、大学院での学びをそれぞれが体系づけて学び直す(re-learn)することを目的としている。総括はパーマネントポートフォリオを作成する形で行う。授業の望むにあたっては、レジメ、参考資料、作成した課題等の整理が求められる。 大学院での学びの総括とそれに基づく授業づくりをテーマとし、大学院での学びを総括したうえで、総括をいかした総合的な学習の時間の授業構想を作成することができることを到達目標とする。	

			学校臨床とかかわり合う力Ａ	かかわり合いの基礎となる、臨床心理学や省察の理論を学ぶと共に、カウンセリングや臨床技法を体験的に学ぶ。また、受講生が実習などで体験した子どもとのかかわり合いをグループ省察会を通して事例検討する。 到達目標は下記のとおりである。 (1)かかわり合いの基礎となる臨床心理学や省察の理論を修得する。 (2)ロールプレイによって実践的なカウンセリングの基本姿勢を身につける。 (3)学部卒院生がこれまでに経験した、生徒指導・教育相談・特別支援など学校臨床上の事例について、プロセスレコードを用い演習形式で自己省察ならびにグループ省察を深める。それらを通じて、①子ども理解や見立ての進め方、②教師としてのかかわり方、③子どもと教師のかかわり合いをとらえる際の基盤となる視点を修得する。 （103 角田豊・41　永尾彰子（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
			学校における心理教育	学校教育において浸透しつつある心理教育の概要、及び主要な心理教育プログラムを学ぶ。特に、主要な心理教育プログラムのひとつであるアサーショントレーニングについては、実際に体験し、その理解を深める。 到達目標は下記のとおりである。 ①学校における心理教育の概要を説明することができる。 ②アサーショントレーニングを体験的に理解し、アサーションの姿勢を日常場面で活用することができる。	
		中核教員・リーダー教員養成コース	学校臨床とかかわり合う力Ｂ	かかわり合いの基礎となる、臨床心理学や省察の理論を学ぶと共に、カウンセリングや臨床技法を体験的に学ぶ。また、受講生が学校現場で体験した子どもとのかかわり合いをグループ省察会を通して事例検討する。 到達目標は下記のとおりである。 (1)かかわり合いの基礎となる臨床心理学や省察の理論を修得する。 (2)ロールプレイによって実践的なカウンセリングの力量を身につける。 (3)現職院生がこれまでに経験した、生徒指導・教育相談・特別支援など学校臨床上の事例について、事例検討用フォーマット改訂版（プロセスレコードを含む）を用い演習形式で自己省察ならびにグループ省察を深める。それらを通じて、①子ども理解や見立ての進め方、②教師としてのかかわり方、③子どもと教師のかかわり合いをとらえる視点を修得する。 （103 角田豊・41　永尾彰子（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
			現代の公教育と人間形成の課題	現代社会の様々な現象、とりわけ子どもに関わる現象について、その背景、文脈について分析するとともに、その分析に基づきながら、現代社会における人間形成の課題について考察し、公教育のありようについて検討を行う。 学校のリーダーに求められる文脈を読み解く力を育成するために、現代社会における人間形成の課題を探求することをテーマとする。到達目標は下記のとおりである。 1.現代社会のありように対する認識を深めること 2.現代社会における公教育のありように対する認識を深めること 3.現代の公教育における人間形成の課題に対する認識を深めること	
		学校臨床力高度化系コース共通	省察実践研究Ⅰ	教職専門実習の翌日にその経験を振り返り、省察を行うこと、大学院の講義・演習科目での知見と教職専門実習での経験とを関連付けながら、受講生間の対話を通じて問題の探索を行うこと、教職専門実習とは別の学校等においてフィールドワークを行い、実地経験を通じて問題の探索を行うこと、以上のような演習を受講生の主体的な取り組みを基本に展開していく。 教職専門実習における様々な経験を振り返り、その背景や現象の意味について分析、考察し、大学院での講義、演習での学びも参照しながら、学校教育に関する理論知、実践知を深めることをテーマとする。 （1 竺沙知章・2 片山紀子・3 河野和清・4 児玉祥一・5 谷川至孝・6 船田智史・ 23 徳永俊太・24 安達知郎・25 網谷綾香・33 福嶋祐貴・34 佐古清（実務家教員）・35 佐伯卓也（実務家教員）・39 新谷幸三（実務家教員）・102 水本德明・103 角田豊・104 青砥弘幸・105 森口洋一） 共同して担当する。	共同
			省察実践研究Ⅱ	教職専門実習の翌日にその経験を振り返り、省察を行うこと、大学院の講義・演習科目での知見と教職専門実習での経験とを関連付けながら、受講生間の対話を通じて問題の探索を行うこと、教職専門実習とは別の学校等においてフィールドワークを行い、実地経験を通じて問題の探索を行うこと、以上のような演習を受講生の主体的な取り組みを基本に展開していく。 １年次（短期履修生は前期）の学び並びに教職専門実習における様々な経験を振り返り、その背景や現象の意味について分析、考察し、大学院での講義、演習での学びも参照しながら、学校教育に関する理論知、実践知を深めることをテーマとする。 （1 竺沙知章・2 片山紀子・3 河野和清・4 児玉祥一・5 谷川至孝・6 船田智史・ 23 徳永俊太・24 安達知郎・25 網谷綾香・33 福嶋祐貴・34 佐古清（実務家教員）・35 佐伯卓也（実務家教員）・39 新谷幸三（実務家教員）・102 水本德明・103 角田豊・104 青砥弘幸・105 森口洋一） 共同して担当する。	共同

	教科研究開発高度化系	人間発達探究コース	人間発達セミナー	（概要）　人間発達探究コースの必修科目として、コース全体に関わる内容を概観する。具体的には、教育学・心理学・発達障害・幼児教育の４つの分野について、基本的な事柄や現代的な課題などを取り上げ、検討する。 人間発達探究コースを構成する４つの分野（教育学・心理学・発達障害・幼児教育）に関する基本的な事柄や現代的な課題について理解を深める。 （オムニバス方式／全15回） （21　樋口とみ子・８　榊原禎宏／4回）（共同） 第1回にオリエンテーションとして人間発達探究コースの概要について説明後、第2回と第3回で、教育学の観点から、現代的な教育課題、学習指導要領の改訂、教育制度改革について取り上げる。第15回に、まとめとして、人間発達について論じる。 （26　田爪宏二／4回） 第4回から第7回まで、心理学の観点から、学校教育と心理学、生涯発達の捉え方、心理発達の基礎理論、心理学的実践研究・事例研究の方法について取り上げる。 （76　牛山道雄／2回） 第8回と第9回で、特別支援教育の観点から、特別支援教育の概略と現状、特別支援教育の探究方法（関連学会、ジャーナルの紹介、研究動向）について取り上げる。 （49　小谷裕実／2回） 第10回と第11回で、特別支援教育の観点から、特別支援教育と医療、学校と保護者との連携について取り上げる。 （12　古賀松香／1回） 第12回で、幼児教育について、幼児教育学からみる幼児教育を論じる。 （75　佐川早季子／1回） 第13回で、幼児教育について、幼児心理学からみる幼児教育を論じる。 （11　平井恭子／1回） 第14回で、幼児教育について、保育内容からみる幼児教育を論じる。	オムニバス方式・共同（一部）
			認知発達と学習の心理学	発達心理学、認知心理学の視点を中心に、幼児及び児童生徒の学びの理解とそこにおける教育的支援について学習する。まずは学齢期の学習の基盤となる認知の基礎過程の特徴とその発達について具体的なトピックスを取り上げて解説する。その上で、認知発達の個性や個人差、および発達的な課題の捉え方と、それを踏まえた教師の支援のあり方について、臨床発達心理学的視点を交えながら考察する。 到達目標は下記のとおりである。 １．認知発達の視点を中心に、現代の発達心理学における知見や課題について理解している。 ２．認知発達と学習に関する課題について、教育場面との関わりから考察することができる。 ３．認知発達と学習に対する心理学的支援の視点と具体的な技法について理解している。	
			特別支援教育の理論と実践	通常の学級においても、特別支援教育の実践が求められている。この科目では、特別支援教育の理念・仕組みについての理解を深めながら、障害のある子どもを視野に入れた授業づくり、合理的配慮の考え方と進め方、教職員間および専門職間の連携のあり方などについて学ぶ。到達目標は下記のとおりである。 ・特別支援教育の理念・仕組み・教育課程等について理解することができる。 ・特別支援教育における連携・協力の重要性について理解することができる。 ・特別支援教育の現状や実際の取組みについて理解することができる。 ※学校臨床力高度化系の初任期教員養成コース、教科研究開発高度化系の人間発達探究コースで、クラス分けを行う。 （オムニバス方式／全15回） （10　佐藤克敏／5回） 第1回ではオリエンテーションとして、授業の概要や進め方等について確認する。第2回から第5回にかけて、特別支援教育の理念、ICFと障害理解、障害の理解と対応、インクルーシブ教育システムと特別支援教育支援体制について論じる。 （77　丸山啓史／5回） 第6回から第10回にかけて、諸外国におけるインクルーシブ教育の取り組み、保護者や福祉機関等との連携協力、障害のある子どもの教育の歴史、特別支援教育の教育課程の変遷、特別な教育的ニーズに基づく対応について論じる。 （22　相澤雅文／5回） 第11回から第15回にかけて、通常の学級における特別支援教育と配慮の実際、通級による指導における教育の実際、特別支援学級・学校における教育課程、特別支援教育における自立活動、及び授業のまとめと、特別支援教育の現状と課題を整理する。	オムニバス方式
			子育て支援の理論	保育現場では近年、多様な家庭背景を持つ子どもが在籍している。本授業では、現代の子どもと保護者がおかれている状況を理解するとともに、子育て支援に関わる法制度とさまざまな形で展開されている子育て支援の実践について、必要な知識を学ぶ。 到達目標は下記のとおりである。 ・今日の子育てが直面する課題、及びさまざまな生きづらさを抱える子どもと保護者の問題について理解し、自分なりの考えを述べることができる。 ・子育て支援の現状及び問題をふまえ、改善策を考えることができる。	

		教科学習探究コース	教科カリキュラム開発セミナー	（概要）　このセミナーでは、子どもの発達段階や校種間連続あるいは教科横断などを視野に入れた上で、各教科のカリキュラムマネージメントに関する実践的展開力を育成する。 　各学問分野における子どもの発達特性について理解し、子どもの発達特性を意識した校種間連携のカリキュラムをデザインし、 各学問分野の特性を理解した上で、教科横断型授業を実践的に開発し、グローバル化を理解した上で、言語コミュニケーションや多様性の観点から学習をデザインすることができることを到達目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （14　植山俊宏・16　黒田恭史・20　清村百合子／3回）（共同） 　第1回でオリエンテーションを実施、文献研究及び事例分析の目的と方法を論じる。第14回及び第15回でグローバル化の視点からみたカリキュラムデザインとして、カリキュラムの構想・立案、考案したカリキュラムの交流・検討を行う。 （14　植山俊宏・16　黒田恭史／4回）（共同） 　第2回において言語分野における子どもの発達特性、第5回において発達特性を意識した言語分野における幼小接続のカリキュラムデザイン、第8回において発達特性を意識した言語分野における小中接続のカリキュラムデザイン、第12回において教科横断型授業のカリキュラム開発・カリキュラムの構想・立案を論じる。 （16　黒田恭史・20　清村百合子／4回）（共同） 　第3回において数理自然技術分野における子どもの発達特性、第6回において発達特性を意識した数理自然技術分野における幼小接続のカリキュラムデザイン、第9回において発達特性を意識した数理自然技術分野における小中接続のカリキュラムデザイン、第11回においてSTEAM教育の視点からみた教科横断型授業の可能性を論じる。 （20　清村百合子・14　植山俊宏／4回）（共同） 　第4回において芸術分野における子どもの発達特性、第7回において発達特性を意識した芸術分野における幼小接続のカリキュラムデザイン、第10回において発達特性を意識した芸術分野における小中接続のカリキュラムデザインを論じ、第13回において教科横断型授業のカリキュラム開発・考案したカリキュラムの交流・検討を行う。	オムニバス方式・共同
			教科授業開発セミナー	（概要）このセミナーでは、教科の専門的知識や学習の成立についての諸理論を踏まえた上で、学習指導の立案・実践・省察という授業デザイン力を育成する。授業の到達目標としては下記のとおりとする。 １．授業デザインを構成する諸要素について理論的に理解することができる。 ２．各学問分野の特性を踏まえた教育方法について理解することができる。 ３．授業デザインに関する理論的な考え方に基づいて学習指導案を作成することができる。 ４．作成した学習指導案に基づき、仮説生成模擬授業を実践することができる。 ５．仮説生成模擬授業について省察し、授業評価することができる。 （　オムニバス方式／全15回） （14　植山俊宏・18　原田信一・20　清村百合子／3回）（共同） 　第1回においてオリエンテーションとして、授業に関する諸理論を踏まえたうえで、授業デザインをすることの意義について論じる。第14回及び第15回において、仮説生成模擬授業の省察として、子どもの思考の筋道の観点及び教師の指導性の観点から論じる。 （14　植山俊宏・18　原田信一／4回）（共同） 　第2回において授業デザインの基礎として目標・子ども理解・評価について、第4回において言語分野における教育方法の理論と実際、第8回において各教科における表現する力の育成について、第11回において仮説生成模擬授業の実践として言語分野の授業を論じる。 （20　清村百合子・14　植山俊宏／4回）（共同） 　第3回において授業デザインの基礎として教材・単元構成・学習過程について論じ、第6回において芸術分野における教育方法の理論と実際、第10回において学習指導案の検討、第13回において仮説生成模擬授業の実践として芸術分野の授業を論じる。 （18　原田信一・20　清村百合子／4回）（共同） 　第5回において数理自然技術分野における教育方法の理論と実際、第7回において児童生徒の学習意欲と自己効力との関連、第9回において学習指導案の立案・作成、第12回において仮説生成模擬授業の実践として数理自然技術分野の授業を論じる。	オムニバス方式・共同

		教科研究開発高度化系コース共通	教育実践研究セミナー	（概要）　「学びつづける教員」として、自らの教育実践の成果を「研究」に深化させ、その成果を再び教育実践にフィードバックさせるために必要な、研究の計画立案から調査と分析の手法、また研究倫理と論文執筆の際のルールなど基本的な理解とスキルについて学ぶ。後半はクラスに分かれ、演習形式で実施する。 教育実践を、さらに研究レベルまで深めるために必要な知識と技能を身につけ、学校教育において調べ学習や探究的学習の方法や注意点について適切に指導することができることを到達目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （13　平石隆敏／2回）　第1回で、ガイダンスを実施して授業の概要と授業の進め方を説明後、第2回まで社会の公共的な信頼に応える研究活動における研究倫理について論じる。 （96　比良友佳理／1回）　第3回で、論文と引用・著作権の観点から、研究成果を公表する際のルール、論文執筆のための著作権と適性な引用について論じる。 （26　田爪宏二／1回）　第4回で、研究に求められる調査について、エビデンスにもとづく研究、量的調査と質的調査について論じる。 （79　中俣尚己／1回）　第5回で、量的調査について論じる。 （57　土屋雄一郎／1回）　第6回で、質的調査について論じる。 （26　田爪宏二・79　中俣尚己・57　土屋雄一郎／9回）（共同） 第7回から第15回まで、調査演習を実施する。研究課題の作成から、調査、調査結果分析、研究成果のまとめまで、演習形式で実施する。	オムニバス方式・共同（一部）
			実践課題研究Ⅰ	教科研究専門実習Ⅰを通して得られた課題意識を深め、実践課題研究Ⅱにつなげる。その際、大学院での学び、特に教育実践研究セミナーでの知見と関連付ける。 修了論文作成のための方法論を理解し、ゼミでの発表等を通して課題意識を深めることを到達目標とする。 （7 徳岡慶一・8 榊原禎宏・9 相澤伸幸・10 佐藤克敏・11 平井恭子・12 古賀松香・13 平石隆敏・14 植山俊宏・15 西本有逸・16 黒田恭史・17 谷口和成・18 原田信一・19 井上えり子・20 清村百合子・21 樋口とみ子・22 相澤雅文・26 田爪宏二・27 西村佐彩子・28 寺田守・29 小山宏之・30 樫下達也・31 山内朋樹・32 中村翼） 共同して担当する。	共同
			実践課題研究Ⅱ	教科研究専門実習Ⅰ、教科研究専門実習Ⅱ、実践課題研究Ⅰを通して得られた課題意識に基づいて修了論文を作成する。 修了論文作成のための方法論を理解し、ゼミでの発表等を通して課題意識を深め、修了論文をまとめることを到達目標とする。 （7 徳岡慶一・8 榊原禎宏・9 相澤伸幸・10 佐藤克敏・11 平井恭子・12 古賀松香・13 平石隆敏・14 植山俊宏・15 西本有逸・16 黒田恭史・17 谷口和成・18 原田信一・19 井上えり子・20 清村百合子・21 樋口とみ子・22 相澤雅文・26 田爪宏二・27 西村佐彩子・28 寺田守・29 小山宏之・30 樫下達也・31 山内朋樹・32 中村翼） 共同して担当する。	共同
コース選択科目	学校臨床力高度化系	初任期教員養成コース	授業コミュニケーション論	教える教師と学ぶ子どもたち、そして子どもたち同士のコミュニケーションに焦点を当てて、その教育方法について検討する。具体的には、教科や教科外（総合的学習などの学際的な領域）における授業コミュニケーションの課題について実践的に論じ、模擬授業を行う。その折に、発問や板書の方法等についても議論する。授業コミュニケーションを大切にしている実践者を選び、フィールドワークを実施する。 授業におけるコミュニケーションの大切さに気づき、コミュニケーションを大切にした授業を実践できることを到達目標とする。	
			授業研究の理論と実践	本授業は共通科目で学修したカリキュラムの開発や編成、教科指導に関する理論や基本的スキルを基盤とし、授業力向上のために学校現場で広く実践されている教員による校内の「授業研究（会）」の意義と方法を体験的に学び、同僚性の中で互いの職能を向上させる能力を身につけることを目標としている。 本授業では実際の学習指導案や授業を素材に、指導案や授業を分析・評価を行うことで、授業における中心となる課題を明らかにし、授業改善の具体的方法を提案できることをめざしている。 本授業ではフィールドワークを実施する。学習指導案を事前に検討し、授業観察の観点を各自が明確にもった上で授業参観を行い、参観後は授業者を交えて学習指導案の内容や参観した授業についての質疑応答を行う。それらをもとに、本授業の中で授業研究会を開催する。 個人および組織で行う授業研究をテーマとし、到達目標は下記のとおりである。 1.授業力を高めるために授業研究と授業研究会が果たす意義と役割について理解する。 2.教科教育の知見を踏まえながら、授業研究の基礎となる学習理論の変遷とそれぞれの理論の特性について理解する。 3.学習指導案の分析・評価の方法や授業観察の観点の設定や授業分析・評価のあり方について理解する。 4.全体での議論を踏まえながら、実際の授業について、学習指導案の分析、授業の評価、授業改善の提案を行うことができる。 （6 船田智史・23 徳永俊太） 全回を共同して担当する。	共同

			授業力高度化演習	「教科指導実践演習」および「教職専門実習」の学びを踏まえ、自身の実践上の課題について、模擬授業により課題解決の方策を探る。 自身の実践上の課題を踏まえた上で授業参観を行う。「教職専門実習」での学びを生かし、「単元を通した授業の指導計画と教材開発」を行い、そのうえで「学習指導案」を作成し「模擬授業」を実施する。「模擬授業」は受講生全員が行い、最後に「授業改善」についてグループワーク・全体討論などを行い自身の教科指導力の高度化を図る。 到達目標は下記のとおりである。 ・自身の実践上の課題を整理したうえで、自身の授業について理論的に分析できる。 ・単元を通した授業計画づくりおよび教材開発と学習指導案づくりを行ったうえで模擬授業を行い、省察を行うことができる。また、理論に基づいた授業改善案を作成することができる。 （33　福嶋祐貴・4　児玉祥一・105　森口洋一・35　佐伯卓也（実務家教員）・39　新谷幸三（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
		中核教員・リーダー教員養成コース	教育政策と教育行政・学校経営の課題	今日の教育政策は、教育改革として、地方分権、規制緩和を軸に国民社会の変容に対応する公教育システムの転換を図るものとして展開されてきている。保護者や地域住民のニーズに応えるために、「開かれた学校」「特色ある学校」の実現、「学校の自律性確立」が課題とされ、学校経営を自律的に担うスクールリーダーの育成が求められている。教育改革の意味するものを明らかにし、自律的学校経営を確立するために必要な教育行政と学校経営の新たな関係について考察する。 教育政策の動向と教育行政・学校経営の課題について認識を深めることをテーマとする。到達目標は下記のとおりである。 ・教育改革の全体像について理解すること。 ・教育行政制度の全体構造と改革課題について理解すること。 ・学校経営の構造と改革課題について理解すること。 ・学校の権限、責任の観点から、教育行政、学校経営の改革動向について考察し、自らの見解を示すことができること	
			学校・教員の裁量権と法的責任	学校教育に関わる法的問題を対象とし、その理解を深めるとともに、学校・教員の法的責任について適切に判断できる力量の育成を目指す。 到達目標は下記のとおりである。 ・学校教育に関わる法規に対する理解を深めること。 ・学校経営に必要な教育法規に関する基本的事項について理解すること。 ・学校経営における法的思考力について理解し、その力量を高めること。 ・学校、教員の裁量権について適切に理解し、その法的責任について判断できること。	
			学校づくりとリーダーシップ	学校づくりに必要なリーダーシップのあり方に関して検討し、学校におけるリーダーシップの諸相を分析し、その実態、特質を浮かび上がらせるとともに、学校づくりを進めるうえで必要なリーダーシップ戦略を構想する。 学校づくりにおけるリーダーシップのあり方に関する理解を深めることをテーマとする。到達目標は下記のとおりである。 1.学校づくりにおけるリーダーシップに関する理解、認識を深めること 2.学校づくりにおけるスクールリーダー、ミドルリーダーの役割に関する理解を深めること 3.「わたしのリーダーシップ戦略」を構想できる力量を身につけること	
			学校組織改善の理論と手法	近代の学校制度とそこにおける教職と学校の組織特性について検討する。その後、学校の組織力を向上するためのリーダーシップの育成を目指して、組織論的な観点から勤務校を分析し、課題を明確化し、解決の方略を検討する活動を通して、学校組織を改善するための理論と手法を身につける。 到達目標は下記のとおりである。 1.近代の学校と公教育制度の特質を理解し、それに基づいて学校改革を構想できる。 2.学校組織の特質とそこから要請されるマネジメントの在り方について説明できる。 3.組織改善のための様々な手法を理解し、状況に応じて活用できる。	
			教職員の意識と成長	教職員個々の力を引き出すリーダーシップの育成を目指して、教職員に対するインタビュー調査を実施することを通じて、教職員の意識を理解し、その成長を促すための理論と手法を学ぶ。 到達目標は下記のとおりである。 1.今日の教職員の意識と成長の課題について説明できるようになる。 2.教職員の意識と感情に注目して、教職員の成長を促すリーダー行動を考えることができるようになる。 3.質的データの分析、解釈の手法を理解し、基礎的な技法を習得する。	

			カリキュラムマネジメント	本科目では学校においてカリキュラムの開発と実践を進めるカリキュラムマネジメントについて学ぶ。学校の教育目標実現のためのカリキュラム構想のあり方、その開発と実践における教職員の協働や事務、校内研究の推進、カリキュラム実施に関わる評価と改善のあり方などについて検討すると共に、実際に特色あるカリキュラムを構想し、カリキュラムマネジメントについて実践的に学ぶ。 これまでの教員経験に基づくカリキュラムマネジメントの省察・実践をテーマとし、到達目標は下記のとおりである。 ・カリキュラムマネジメントの基本を理解できること ・学校の教育目標達成に向けたカリキュラムを構想し、実践するマネジメント力を身につけること （5　谷川至孝・35　佐伯卓也（実務家教員）） 全回を共同して担当する。	共同
		学校臨床力高度化系コース共通	学校におけるグループダイナミクス演習Ⅰ	家族療法の技法のひとつであるリフレクティングプロセスを応用して、参加者の学外実習の体験をふりかえる。具体的には、以下の手順で授業を進める。 ・教員が聞き手、参加者のうち１名が話し手、そのほかの参加者が観察者となり、話し手が聞き手に学外実習での気になっていることを話す。 ・話し手の話が一段落したら、観察者たちが話し手と聞き手の話を聞いていて、感じたことを話し合う。 ・話し手−聞き手セッション、観察者セッションを交互に行うことで生じるグループダイナミクスを活用して、聞き手の体験を深める。 到達目標は下記のとおりである。 ①学外実習の体験を内省することができる。 ②グループダイナミクスを理解することができる。 ③カウンセリングの基本的技法を使うことができる。	
			学校におけるグループダイナミクス演習Ⅱ	家族療法の技法のひとつであるリフレクティングプロセスを応用して、参加者の学外実習の体験をふりかえりを促進するようなグループをファシリテートする。以下の手順で授業を進める。 ・教員、あるいは参加者のうち1名が聞き手、参加者のうち１名が話し手、そのほかの参加者が観察者となり、話し手が聞き手に学外実習での気になっていることを話す。 ・話し手の話が一段落したら、観察者たちが話し手と聞き手の話を聞いていて、感じたことを話し合う。 ・話し手−聞き手セッション、観察者セッションを交互に行うことで生じるグループダイナミクスを活用して、聞き手の体験を深める。 到達目標は下記のとおりである。 ①学外実習の体験を内省することができる。 ②グループダイナミクスを理解することができる。 ③グループをファシリテートすることができる。	
			危機管理のための事例演習	学級経営や生徒指導等様々な場面において生じる事象を危機管理の視点から捉え、適切な対処の方法等を考察し、ロールプレイ等を通して実践力につなげる。 到達目標は下記のとおりである。 ・学級経営や生徒指導等の様々な場面において生じる事象を危機管理の視点から捉えられる ・「危機を生まない、危機を回避する、危機に対応する」実践について考察できる	
			子ども理解と臨床技法	人格理論・セラピー理論である深層心理学や精神分析の理論を学び、児童生徒についての深い理解と成長促進的なかかわり方について学ぶ。また、非言語的な表現療法である描画法や箱庭療法を体験的に学ぶことで、子どもの表現の読み取り方やかかわり合いにおける相互作用の意義を学ぶ。 到達目標は下記のとおりである。 1. 子ども理解に有用な深層心理学・精神分析の考え方を身につける。 2. 描画法や箱庭療法の体験学習を通して、非言語的な表現・相互交流の意義を学ぶ。	
	教科研究開発高度化系	人間発達探究コース	幼小接続の理論と実践	幼児期の教育と小学校教育の接続に関する理論や基本的な構成概念について学ぶ。その上で、実際の現場で生じている幼小連携・接続に関する課題や各地域における幼小接続カリキュラムの具体例を元に、効果的な幼小接続のあり方について、演習を交えて考える。 到達目標は下記のとおりである。 1. 幼小連携と幼小接続の概念について説明できる 2. 幼小接続カリキュラムにおける重要な点を説明できる 3. 幼小接続期の活動提案ができる	
			子育て支援の実践	地域社会の紐帯や家族の絆の衰退に伴い、育児をめぐる困難が広がる中で、社会的なサポートの必要性が高まってきた。いま、子育て支援の取り組みは、保育・ 家庭教育、地域福祉、社会教育、子ども文化、まちづくりの分野で広がっている。本講義では、幼稚園、保育所、地域で行われている子育て支援の現状を知るとともに、今子育て支援において何が課題となっているかについて考え、自ら子育て支援を計画、実践する力を身につける。 幼児教育、保育施設や地域子育て支援拠点において、参加観察を行うことを通して、子育て支援の実際について体験的に学ぶとともに、受講者自らがもつ課題意識に基づいて子育て支援内容の開発、計画、省察を行う。	

		教科学習探究コース	言語・文化セミナー	（概要）　この科目では、国語教育、英語教育の各分野における実践例と関連諸科学の知見を融合させ具体的に検討しながら、言語教育の学習デザインの基盤となる視座を構築する。そのため、国語教育、英語教育の各分野の教員が協働して授業を担当し、協働的な学びを中心とした学習を実施する。 　到達目標は下記のとおりである。 1. 国語教育の学力観について具体的に説明できる。 2. 英語教育の学力観について具体的に説明できる。 3. 国語教育と英語教育の言語観について、共通点と相違点を説明できる。 （オムニバス方式／全15回） （28　寺田守／7回） 　第1回から第7回まで、国語教育について、学力観、学力評価、教材、学習意欲、社会的構成主義、対話的学習の観点から、言語教育の学習デザインを論じる。 （15　西本有逸／7回） 　第8回から第14回まで、英語教育について、学力観、学力評価、教材、人格形成、社会的構成主義、対話的学習の観点から、言語教育の学習デザインを論じる。 （28　寺田守・15　西本有逸／1回）（共同） 　第15回に、国語教育と英語教育の言語観、学力観、学習観、授業観について共通点と相違点を論じ、国語教育と英語教育の授業について相互交流の在り方について論じる。	オムニバス方式・共同（一部）
			公共・文化セミナー	公共的な世界のあり方やその変容について理解するとともに、現代社会において主体的に判断し、反省的に意思決定できる力を育成するための学習デザインの構想について、グループワークやフィールドワークなどを通して学ぶ。 （13 平石隆敏・32中村翼） 　全回を共同して担当する。	共同
			数理自然・技術セミナー	このセミナーでは、現代の生活・社会・自然における様々な事象を、数学・理科・技術それぞれの観点から捉え、教科横断的な学びを通して、科学的思考力・探究力を育成する学習デザインの力量形成を目指す。学びを通じて見出した課題に対する各教科の専門的知識を共有し、協働的に課題解決に取り組む。 　到達目標は下記のとおりである。 1. 子どもの発達段階から見た数学・理科・技術分野の特性について理解することができる。 2. 数学・理科・技術分野の特性を理解した上で、教科横断型授業を実践的に開発することができる。 3. STEAM型授業デザインを構成する諸要素について理論的に理解することができる。 4. 授業デザインに関する理論的な考え方に基づいて学習指導案を作成することができる。 5. 作成した学習指導案に基づき模擬授業を実践し、省察を通して授業評価することができる。 （16 黒田恭史・17 谷口和成・18 原田信一） 　全回を共同して担当する。	共同
			健康・生活デザインセミナー	（概要）　このセミナーでは、健康・生活分野に関する教育研究の理解を中心に、生活環境や運動・スポーツの分野にまで視野を拡げ、生涯にわたり健康的で、Quality of Life（人生の質）の高い生活を実現できる力がつく新たな学びについて、多角的な観点からデザインしていく力を育成していく。そのため、保健体育科教育・家庭科教育の各分野の教員が共同し、実技や実習なども含めた授業において協同的な学びも取り入れた学習を展開する。 　到達目標は下記のとおりである。 　１　健康・生活分野に関する教育研究の動向を理解する 　２　健康・生活分野に関する学びをデザインすることができる （オムニバス方式／全15回） （19　井上えり子・29　小山宏之／1回）（共同）　第1回で、オリエンテーションとして、授業の概要と到達目標について説明する。 （92　深沢太香子／1回）　第2回で、衣生活分野の研究動向について論じる。 （65　湯川夏子／1回）　第3回で、食生活分野の研究動向について論じる。 （66　延原理恵／1回）　第4回で、住生活分野の研究動向について論じる。 （91　權眞煥／1回）　第5回で、生活工学分野の研究動向について論じる。 （19　井上えり子／3回）　第6回から第8回で、家庭科教育の授業計画と授業実践について論じる。 （29　小山宏之／2回）　第9回で、発育発達分野の研究動向について論じる。第15回にまとめとして授業での学びを共有する。 （89　林英彰／1回）　第10回で、スポーツ文化分野の研究動向について論じる。 （100 浅沼徹／2回）　第11回及び第12回で、保健分野の研究動向について論じる。 （101 岡田雄樹／1回）　第13回で、体育科教育の授業計画について論じる。 （90　小松崎敏／1回）　第14回で、体育科教育の授業実践について論じる。	オムニバス方式・共同（一部）

			芸術探究セミナー	このセミナーでは、美術・音楽における共通点および相違点に関する知見を深めることで、それぞれの学びを構成する力を養うとともに、芸術領域に関する総合的な学びをデザインする力を養う。学校教育における芸術分野の学びをデザインする基礎を打ち立てるために、自ら表現者となって表現活動を行い、実践に生かすことのできる表現力を養う。また、フィールドワークやワークショップなどの実践的な活動を通して、芸術に対する多角的な視点や柔軟な思考力を養う。そのため、音楽教育・美術教育の各分野の教員が協働して授業を担当する。 　到達目標は下記のとおりである。 1. 芸術分野の現代的展開について理解できる。 2. 表現活動を通して授業実践に生かすことのできる表現力を身につける。 3. 芸術に対する多角的な視点や柔軟な思考力を身につける。 （30 樫下達也・31 山内朋樹） 　全回を共同して担当する。	共同
			国語科教育実践演習　－日本語学－	コーパスと呼ばれる、実際に使用された言語データをもとに、日本語の特性について様々な角度から分析を行う。大量のテキストデータから、統計的な技法を駆使して価値あるデータを取り出すテキストマイニングの手法を身に着ける。 　コンピュータを使って日本語を分析することを通して、コンピュータの操作に習熟し、GREP、Excel、仮説的統計検定の技法を身につけることを到達目標とする。	
			国語科教育実践演習　－近現代文学－	この科目では、国語科の主たる教材の一つである文学教材に関して、高度な指導力や、現代の教育課題に対応した教材研究・教材開発・授業開発を行える力を養成するために、その基礎となる教科内容について学校教育と有機的に結び付けながら理解を深めるとともに、文学教材の可能性を探る。授業担当者の専門領域に即して、日本の近現代文学の教材をとり上げ、これまでの文学研究を踏まえて教材研究を行うとともに、文学教材の価値を発見し、新しい授業のありかたを探る。 　到達目標は下記のとおりである。 1. 文学教材について教材研究の方法を身につけている。 2. 文学教材について現代の教育課題と関連づけながら新たな教材開発や授業開発を行うことができる。	
			国語科教育実践演習　－漢文学－	漢文学の中から国語科の漢文教材となりうる作品を精読し、教材研究の方法を学ぶ。さらに古典教材としての可能性や言語文化としての価値についても考察する。今年度は『論語』をとり上げる。 　到達目標は下記のとおりである。 1. 漢文教材について教材研究の方法を身につけている。 2. 漢文学の古典としての普遍性や言語文化としての価値について説明することができる。	
			国語科教育実践演習　－日本語教育学－	日本語を母語としない外国人児童生徒等が急増しており、とくに散在地域における個々の教員の認識や力量の向上が求められている。この授業では、講義や活動（ディスカッション、模擬授業等）を通じて、外国人児童生徒等教育についての基本的な考え方を理解し、教育実践に求められる基礎的な力を養う。 　到達目標は下記のとおりである。 ・外国人児童生徒等の状況をその背景を踏まえて的確に把握することができる。 ・外国人児童生徒等に必要な日本語・教科の力を育成することができる。 ・日本人児童生徒を含む全ての児童生徒に異文化間能力を育成することができる。 ・外国人児童生徒等教育を実施するために必要な学校や地域との連携の重要性を理解し、そのための取組について構想することができる。 ・外国人児童生徒等教育を自身の成長や共生社会実現につなげることができる。	
			社会科教育実践演習　－日本史－	映画「もののけ姫」を素材に、最新の歴史学研究をふまえ、かつ初等・中等教育で利用可能な教材を作成する。 テキストは授業者が2015年に発表した論考をベースとするが、すでに数年を経過しており、その後の研究などにより、修正すべき点もすくなくない。そのことを意識し、テキストを批判的に読み解き、より正しくかつ応用可能な教材を作成することを目指す。 　到達目標は下記のとおりである。 1.日本史の概説書について、その基礎的な読解力を身につける。 2.日本史に関する近年の研究動向を理解する。 3.歴史研究の成果を教育現場に取り入れるための知識や技能を養う。	
			社会科教育実践演習　－西洋史－	本授業ではヨーロッパの古代から近現代までの研究動向を概観し、それぞれの時代について議論されていることを把握する。そのうえで、西洋史における議論をどのように日本史と接続し、また社会科教育に活かしていくことができるのかを考えていく。 　到達目標は下記のとおりである。 ・西洋史研究の現況を理解することができる。 ・歴史研究の具体的なテーマについて議論することができる。 ・最新の専門研究と社会科教育の橋渡しができる。	

			社会科教育実践演習　－近現代史－	受講生による報告や発表を中心として、近現代史研究の視点から社会科（地歴科／公民科）教育の現状について考察し、その課題や問題点などを取り上げ検討する。 到達目標は下記のとおりである。 １．近現代史の研究と、教科書や小・中・高校の教育との差異を認識できる。 ２．今後、教科書がどのように変わっていくか、見通すことができる。	
			社会科教育実践演習　－地理－	社会科（小中学校）及び地理歴史科（高等学校）の地理領域で重視される地域調査について、事前学習でのデスクワーク（文献や資料の精読と要旨執筆など）及び現地フィールドワークを通じて深化を図る。フィールドワークでは現地調査の技法に留まらず、児童生徒を連れての野外学習（遠足、工場見学、修学旅行など）における引率業務についても学びます。 到達目標は下記のとおりである。 重要性が叫ばれていながら、実際には体験した人が少ない地域調査について、デスクワークからフィールドワークに至るまで幅広い場面での指導ができるようになります。	
			社会科教育実践演習　－法律－	インターネットやデジタル技術の発達に伴い、著作物の利用が身近なものとなっている。学校ホームページの運営や教材での著作物の利用、生徒が授業中に作成した作品の取り扱いなど、教員も著作権法に関する知識が求められる場面が増えている。この授業では、学校教育の現場で教員として直面する、著作権に関する問題を学習する。 到達目標は下記のとおりである。 ・教育現場で必要な著作権知識を身につける。 ・著作権教育、知的財産法教育を行う上で基礎となる法的思考力を身につける。	
			社会科教育実践演習　－政治－	社会科（中学社会、公民）の教科書に記載されている政治に関する重要な概念（民主主義、立憲主義など）は、通常、「国民自身による政治」を理想とする立場から解釈され、説明されている。本授業では、これらの概念を、現実の政治の理解や評価に有効な別の視角（「国民のための政治」）から考察することを目指す。授業担当者による講義と、受講生の発表および報告とを中心とする。 到達目標は下記のとおりである。 １　社会科で取り上げられる重要な概念に関して、具体的なイメージをもつことができる。 ２　現在の政治制度を、政治理念と結びつけて説明することができるようになる。	
			社会科教育実践演習　－社会学－	「調査をする」という行為は、実証的な社会学を探究するときに基本的な営みである。また、調査能力自体は、学校教育のさまざまな場面で強く求められるスキルの一つでもある。授業では、新聞や雑誌の記事、ルポルタージュ、社会学・人類学のモノグラフの分析を通して、フィールドワークの基本的な考え方や方法論に関して議論を深める。 到達目標は下記のとおりである。 具体的な経験と共にある社会調査の意義や面白さを共有しながら、現代世界を複眼で見る力を養うことで、「調べ学習」や「地域に学ぶ」調査の求められる基本的な考え方と方法論を身につけることができる。	
			社会科教育実践演習　－経済－	グローバル化が進んだ国際社会において途上国は様々な経済問題を抱えているのが現状である。本授業では、途上国が抱える経済問題の中で代表的な貧困問題と環境問題を取り上げて、その現状を概観した上で、それらの問題の解決に向けての取り組みを、国際的な枠組みだけでなく、私たちの生活との関係において考えていく。 到達目標は下記のとおりである。 ・途上国の貧困問題や環境問題について理解を深めることができる。 ・途上国の貧困問題や環境問題の解決に向けて私たちができることを理解する。	
			社会科教育実践演習　－倫理－	現代社会について考えるための「見方・考え方」の軸となる「対立と合意」「効率と公正」「行為の結果と行為の動機」などの観点をとりあげ、その背景にある哲学的・倫理学的な理解を基礎にしながら、その事例や授業での展開などについて検討する。 到達目標は下記のとおりである。 1.現代社会の見方・考え方としての「対立と合意」「効率と公正」「行為の結果と行為の動機」などについて理解している。 2.現代社会の見方・考え方を育てる授業を構想することができる。	

			数学科教育実践演習　－解析－	この科目では、算数・数学における解析学に関する教科内容に関連して、特に関数解析、微分方程式に関連する厳密な理論を学び、解析学の本質の理解を深める。そして、具体的な指導案の作成を通じて、解析学の本質を踏まえた教材の工夫を行う。算数・数学の授業を構成する際、よりよい中心発問や補助質問を設定するには、対象となる児童・生徒の理解(児童観・生徒観)はもちろんであるが、取り扱う内容の正しい数学的理解(教材観)が必要である。この科目では関数解析、微分方程式の学びを通じで、極限操作が解析学の本質の1つであることを理解し、また微分方程式の汎用性の視点からも解析学と応用数学とのつながりを意識して、その視点を教材開発につなげることの重要性を学ぶ。 関数解析、微分方程式の学びを通じて、極限操作が解析学の本質の1つであることが理解できることを到達目標とする。	
			数学科教育実践演習　－応用数学－	応用数学の観点から、数理モデルとしてよく用いられる微分方程式とセル・オートマトンについて学ぶ。これらの数理モデルのシミュレーションを行い、小学校・中学校・高等学校における算数・数学とこれらの関連について考察する。 到達目標は下記のとおりである。 1. 高等学校まで学習する算数・数学の内容を踏まえ、それらに関連する応用数学のトピックについて理解する。 2. 微分方程式モデルとセル・オートマトンモデルのそれぞれの特性を理解する。	
			理科教育実践演習　－科学教育－	初等、中等理科教育における科学的思考力の育成において、児童・生徒の認知発達の段階を基盤として、単元間の一貫したつながりを意識した授業構成や実験、教材のあり方等について、国内外の例を参照しつつ講述し、それに基づく指導案の作成、模擬授業の実践及びその議論を通して実践的理解を深める。 到達目標は下記のとおりである。 ・初等・中等理科教育における単元間のつながりを理解し、児童・生徒の認知発達の段階と関連づけた授業構成、教材研究及び設定を行うことができる。 ・上記に基づいた指導案を作成し、授業実践を行い、実践後に自己・相互評価を行い、改善することができる。	
			理科教育実践演習　－分析化学－	化学情報を得るための分析化学的方法論、データ処理法などについて講述する。また、コンピュータを利用した解析手法についても述べる。演習もあわせて行い、理解を深める。 到達目標は下記のとおりである。 １．分析化学的方法論一般についての知識を習得し、それを活用できる。 ２．種々のデータ処理法を用いて、分析データの整理と評価が行える。	
			理科教育実践演習　－有機化学－	有機反応は、反応が起こる際に必ず結合の組替えが起こっており、結合形成にかかわる電子対の流れに着目すると、そのしくみを一つの統一的な考え方に基づいて理解することができる。そこで電子の流れとその表現方法を習得し、その観点から有機反応が起こるしくみについて理解する。 到達目標は下記のとおりである。 １．結合の切断・形成にかかわる電子の流れを理解し、それを正しい表現で書き表すことができる。 ２．有機化合物の構造の効果を理解し、反応の中で起こっている電子の流れを正しく表現できる。 ３．有機化学の基本的な反応について反応のしくみを説明することができる。	
			理科教育実践演習　－動物分類形態学－	初等や中等教育で実際に利用できるような生物教材・実験系に関する演習を行う。特に、多様な動物門に属する身近な動物を材料に、それらの体のつくりを組織的、形態的に観察する。多様な動物を系統に沿って俯瞰できるような実践的な理解を深める。 到達目標は下記のとおりである。 １　色々な動物門の多様な動物を俯瞰して理解できる。 ２　脊椎動物の様々な機能の発達を系統的に理解できる。 ３　身近な動物を材料に、生物の機能を理解する教材を考案できる。	
			理科教育実践演習　－生態学－	初等や中等教育で実際に利用できるような生物教材・実験系に関する演習を行う。特に、身近な動植物を材料に個体群の時空間的動態や、個体の形態や行動を観察し、その決定要因を生物学の理論を踏まえて議論する。 到達目標は下記のとおりである。 １　初等や中等教育で教材利用可能な身近な動植物について知る。 ２　個体群の時空間動態の法則を踏まえて、身近な動植物の分布を理解できる。 ３　自然選択の原理を踏まえて、動植物の適応を理解できる。	
			理科教育実践演習　－植物進化形態学－	維管束植物の茎、葉、根の起源と形態の多様性進化について、分裂組織動態と器官発生（個体発生）の比較に基づく研究内容を紹介しながら解説し、植物の進化過程について、分子系統解析や個体発生比較、機能遺伝子の発現解析などのデータから議論する。 到達目標は下記のとおりである。 １　最先端の植物科学の情報を自ら検索し、考察できる能力を身につける。 ２　植物学の幅広い知見を基に、自ら講義、教材を開発する力を得ることができる。	

			理科教育実践演習　－地質鉱物学－	地球上の堆積物は地球の歴史や自然の歴史を理解する上で重要視していかなければならない。私たちも含め地球上のほとんどの動植物は、地殻上面で生活を営んでいる。しかしながら、私たちは日常の生活の中でそのことにあまりにも無頓着である。昨今の地球環境の変化も日々刻々と堆積物の中に記録されている。さらに過去を振り返れば、地球46億年の歴史が堆積物に記録されている。自然認識の重要性を堆積物から学び、私たちが生きている地球環境について考える。 到達目標は下記のとおりである。 地球上に分布する未個結あるいは半個結堆積物の形成過程について、最新の論文を講述し、堆積学的研究の手法を把握することができる。また、実際の堆積物を観察するなかで堆積物そのものの特徴を理解し、身近な自然をより正確に観察・認識できる基礎を養うことができる。また、実際に自分自身で授業の進め方について考えて教科書の取り扱われ方について考える。	
			音楽科教育実践演習　－声楽－	音楽科の声楽指導をする際には、その作品や音楽的特徴についてよく理解していること、模範となる歌唱力、表現力を身につけていること、また豊かな発声、表現を導き出すための歌唱指導力、授業力が必要となる。この授業では、まず音楽科の教科書に掲載されている歌唱教材を中心に取り上げ、音楽分析や作品研究等を行い、そこから見えてくる作品の魅力を探り、さらに発展させた曲も取り上げながら、まずは受講者自身の歌唱力、表現力などの向上を目指し、様々な声の可能性を探る。また受講生同士でお互いにアドバイスをする等、どのように指導（言葉かけ）すればより豊かな表現、声を導き出せるのか、その先にどのような効果が見出せるのか、想像力を働かせながら、子どもの成長や発達段階に応じた歌唱指導における総合テクニックの習得など、教科専門理論と共に教育現場で応用ができる力を身につける。 到達目標は下記のとおりである。 ・音楽科の歌唱教材について、作品をよく理解し、子供の目線で説明できる。 ・音楽科の歌唱教材、そのほかの作品について、表現豊かに歌唱することができる。 ・それぞれの曲、子どもの成長や発達段階に応じた歌唱指導法、授業力の工夫ができる。	
			音楽科教育実践演習　－器楽－	音楽教科書に掲載されている器楽教材を中心に、学習効果の高い実践や教材の持つ可能性についての教材研究や討論を深め、その内容を器楽で実践的に演習する。 到達目標は下記のとおりである。 学生自らが器楽教材の可能性を生かして、高い学習効果を持った器楽教育の実践案を作成し、模範となる演奏をすることができる。	
			音楽科教育実践演習　－伴奏－	小学校音楽科、中学校音楽科の共通教材の歌唱教材について、歌詞と旋律の関係や楽曲解釈、伴奏するうえでの注意点など、さまざまな角度から研究する。 到達目標は下記のとおりである。 1. 歌詞と旋律の関係、表現法など、歌唱教材について具体的に理解する。 2. 歌唱教材指導上の要点について把握する。 3. 歌唱教材を弾き歌いすることができる。	
			音楽科教育実践演習　－鑑賞－	クラシック音楽の作品について、管弦楽曲や器楽曲、オペラや歌曲などのジャンルごとの特徴を時代区分にそって把握し、個々の作曲家や作品、それらが作曲された歴史的背景について、実際に楽曲を視聴しながら解説する。 到達目標は下記のとおりである。 1.　バロック、古典派、ロマン派など、音楽史の時代区分とそれぞれの特徴を理解する。 2.　各時代、各ジャンルの代表的な作品について、その特徴を理解する。 3.　各時代、各ジャンルの代表的な作曲家について理解する。	
			音楽科教育実践演習　－創作－	音楽科の授業の中でも「音楽づくり」や「創作」は、評価の難しさや、教員自身の経験の少なさゆえに、あまり積極的に実施されていないという現状がある。この授業では「音楽づくり」や「創作」の教材を体系的に分析しながら実践的に学ぶことで、「音楽づくり」や「創作」の授業をリードできるような能力を身につけることを目指す。 到達目標は下記のとおりである。 1.「音楽づくり」や「創作」を音楽科教育で実施する意義を理解することができる。 2.「音楽づくり」や「創作」の授業実践のために必要な知識や考え方を身につけることができる。 3.「音楽づくり」や「創作」の授業計画を立てることができる。 4.「音楽づくり」や「創作」の授業を実施することができる。	
			音楽科教育実践演習　－授業実践史－	あらゆる教育実践の基礎には過去の実践の積み上げがあり、音楽教育実践もまたその例外ではない。本講義では、日本の近現代音楽教育史における音楽実践者たちの思想と実践に焦点を当て、彼らの実践が現在の音楽教育実践とどのように関わっているのかを考える。そのことを通して、受講生がこれからの音楽教育実践を切り開いていくための理論的基礎を身に付けることをめざす。 日本の近現代音楽教育史における音楽実践者たちの思想と実践について理解し、それらが現在とこれからの音楽科教育実践とどのように関連するかを考察できることを到達目標とする。	

			美術科教育実践演習　－デザイン－	デザインは情報や商品、環境を通して私たちの生活営為に密接に結びつき、計り知れない影響力を持っている。総合的、芸術的な性格をもつデザイン教育はどうすれば良いか。ここでは学校でのデザイン活動を主題に授業を展開する。 制作を通してデザインの特質を理解し、教育実践への可能性を考察することができることを到達目標とする。	
			美術科教育実践演習　－工芸－	技法・素材研究を通して、陶芸表現に対する視野を広げ、そこで得られた成果を教育実践にフィードバックしていく方法を模索する。そして、現代の教育における工芸的なものづくりの意義について考察を行う。 到達目標は下記のとおりである。 1.柔軟な視点で素材/技法研究を行い、陶芸表現の可能性を主体的に広げる姿勢を身につける。 2.素材/技法研究の成果を教育実践に展開していく力を身につける。 3.工芸的ものづくりと現代の教育との関連について考察を深めることができる。	
			美術科教育実践演習　－美学・美術理論－	この講義では美術作品を分析し、基礎文献を読み、繰り返しディスカッションをおこなうことで、作品の多角的に理解し、文献の読み方を身につけ、研究発表と議論の仕方を学びます。 講読、議論、執筆、発表を織り交ぜながら美学・美術理論の基本的な研究方法を実践し、その知見をあらためて教育実践に活かす方法を模索します。 到達目標は下記のとおりである。 1. 作品を分析、言語化し、自らの解釈を述べることができる。 2. 美学・美術理論の基本的な研究方法を理解し、実践することができる。 3. 作品の多角的理解を教育実践に活かすことができる。	
			美術科教育実践演習　－書道－	書写・書道の指導者として必要な基礎知識・技術を講義・演習を通して研究し、書写・書道の基礎的理解と教育実践力を養う。 書写・書道の基礎的理解と教育実践力を養うことができることを到達目標とする。	
			保健体育科教育実践演習　－体育学－	スポーツの文化的・社会的意義、スポーツにおける競技規則や公正さの意味を伝えるための授業の在り方を具体的な問題場面に即して考察する。授業計画に示したテーマについて受講者が材料を持ち寄り、授業内容としての生かし方について研究する。 学校体育における主な運動領域について、スポーツ文化論的発想を学習内容に含めるための技法を身につけることを到達目標とする。	
			保健体育科教育実践演習　－健康社会学－	健康社会学とは、健康と病気、保健医療に関する問題に対して、社会学及び統計解析の手法を用いてアプローチし、問題解決策を探る学際的な学問である。 本講義では、健康社会学の理論と方法、及びこれまでの研究知見について理解することを通じて、学校における保健教育の内容の理解を深め、また健康行動科学およびヘルスコミュニケーションの理論に基づく健康啓発ポスターを作成する。 到達目標は下記のとおりである。 1. 健康社会学の理論や、健康と病気に関するトピックスの動向について理解できる。 2. 疫学・保健統計について、その手法と結果の解釈について理解できる。 3. 健康行動科学及びヘルスコミュニケーションの理論に基づき、児童生徒を対象とした健康啓発教材（ポスター）を作成することができる。	
			保健体育科教育実践演習　－学校保健－	事例を手がかりに保健体育科教育に必要な学校精神保健を学ぶ。児童生徒学生の指導に必要な学校精神保健について学ぶ。スポーツ精神医学をスポーツに応用することを学ぶ。 到達目標は下記のとおりである。 1.保健体育授業や学校内での児童生徒の精神状態について正しい判断ができるようになる。 2.児童生徒学生の心と身体の健康増進により保健体育科教育実践力を身につける。 3.最新のスポーツ精神医学に基づいた科学的でエビデンスのある保健体育科教育指導力を向上する。	
			保健体育科教育実践演習　－バイオメカニクス－	バイオメカニクス的分析に用いる力学的手法、数学的手法を学び、運動における効果的な身体の使い方や多くの体育・スポーツに共通する身体技法、及び運動技術の修得過程や発育発達過程について最新の科学的知見をもとに議論する。 到達目標は下記のとおりである。 ・バイオメカニクス的分析手法を理解し、身体運動をバイオメカニクス的観点から分析し、評価することができる 。 ・学校教育において、バイオメカニクス的視点から授業内容について考えることができる。	

			技術科教育実践演習　－電気－	中学校技術の教員は電気を含むエネルギー変換の技術について、（1）生活や社会を支える技術であること、（2）生活や社会における問題を解決する手段であること、および（3）これからの社会の発展と深くかかわっていることを教えなくてはならない。そのためには、エネルギー変換が実際に生活の中で役立っていることを中学生に認識させる必要がある。そこで、この授業では、受講者の生活体験や教育実践の報告をもとにして、エネルギー変換に関する技術教育の現状を分析し、さらに中学校技術においてエネルギー変換（電気）を学ぶことの意味を理解することを目指す。 到達目標は下記のとおりである。 1）エネルギー変換（電気）の技術に係る見方・考え方を身に着けている。 2）中学校技術のエネルギー変換（電気）でどのような授業を行えばよいのかについてイメージができる。 3）上記2）でイメージした授業を行うために必要な教材の選定などができる。	
			技術科教育実践演習　－生物育成－	受講生の栽培経験や教育実践をもとに、小学校生活科や中学校技術で実際に利用できるような植物の栽培に関する教材について演習を行う。多様な栽培植物に共通あるいは特有の植物生理生態的な性質を理解し、なぜそのような栽培方法を行うのか科学的・実践的に理解を深める。 到達目標は下記のとおりである。 １　多様な栽培植物に共通の性質を理解することができる。 ２　個々の栽培植物に特有の性質を理解することができる。 ３　様々な作物や野菜の特徴にあわせた、植物の栽培に関する教材を考案することができる。	
			技術科教育実践演習　－シミュレーション情報－	プログラミングやデータ分析を用いて、数理・技術に関する課題に対して問題を解く方法を学ぶ。問題の設定は、技術情報学の最適化問題や数理的な相転移問題など広範囲に渡って有効なものを学ぶ。理論的な学習だけでなく、それを実際にプログラムを用いて数値的に解析し、得られたデータを分析する。受講者は、理論的な理解を、し自ら問題を解き、結果について検討することを学習する。これは、研究に対するトレーニングとなる。 いくつかの理論を理解し、その理論を基に、数値的に解く方法をプログラミングを通して学び、得られた数値データについて分析を行い、結果の妥当性を論ずることができることを到達目標とする。	
			技術科教育実践演習　－情報ネットワーク－	受講者のネットワーク利用経験や教育実践の報告をもとにして、技術教育の現状を分析し、小学校、および中学校技術・高等学校情報での情報ネットワークの意味を考える。 到達目標は下記のとおりである。 1. 情報ネットワークの構成と意義について理解している。 2. 児童・生徒の発達段階を考慮し、小学校、中学校、高等学校における情報ネットワークについての授業を設計し、実施できる。	
			家庭科教育実践演習　－衣生活－	学校教育における家庭科衣生活領域に関する知識・技術の学びの体系を踏まえ、「健康と安全」、「社会生活と健康」、「豊かな生活」の観点から、被服の意義を考究する。そのために、本授業では、人体生理学と環境人間工学の基礎知識と、被服構成学の基礎技術を習得する実験・実習も行う。 到達目標は下記のとおりである。 ・衣生活分野に関わる専門知識・技術を、理論と関連づけて、より深く理解する。 ・衣生活分野に関わる知識・技術の活用・応用し、より高い生活の質の実現する授業力を向上する。	
			家庭科教育実践演習　－食生活－	受講者の食育や家庭科食生活領域に関する教育実践の報告をもとにして、現代の食生活の問題点について分析するとともに、学校教育における食育や、小学校・中学校・高等学校家庭科における食生活分野の実践を考える。 到達目標は下記のとおりである。 1.現代の食生活の問題点について理解することができる。 2.学校教育における食育の授業や、家庭科における食生活分野の授業を計画することができる。	
			家庭科教育実践演習　－住生活－	初等や中等家庭科教育における住生活分野の内容を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点でとらえ、専門知識や理論と関連づけて解説する。さらに、学校教育における住教育の現状を分析し、社会の変化に対応して、よりよい住生活を営むための住生活分野の課題を設定し、文献調査やフィールドワーク、授業実践のための演習を行い、学校教育における住生活分野の授業実践のための理論と実践を学ぶ。 到達目標は下記のとおりである。 １．住生活に係る事象の見方・考え方を働かせることができる。 ２．住生活分野の内容の理解を深めるための実践的・体験的な活動を展開できる。 ３．住生活分野に関する教材研究や授業構想を行うことができる。	

			家庭科教育実践演習　－生活工学とＩＣＴ教育－	小・中・高等学校の家庭科で扱われる内容とＩＣＴ教育の基礎知識や実践事例について解説を行う。また、ＩＣＴ機材を用いた教育演習を通してＩＣＴ教育の実践力を身につける。 到達目標は下記のとおりである。 １．家庭科の教育内容とＩＣＴ教育の関連性について理解を深め、授業構想力を向上させる。 ２．ＩＣＴの基礎知識や実践演習に触れることにより、学校教育への利用・活用について論じることができるようになる。 ３．ＩＣＴ機材の教育演習を通じてＩＣＴ教育の実践力を身につける。	
			英語科教育実践演習　－構文文法論－	この授業では、「認知言語学の構文理論」（構文文法）に基づく言語研究の成果を踏まえ、同理論の知見を英語教育に活用する視座について学び、教育実践に展開できる力を養う。また、ことばについて思索することの面白さ、文法意識の高揚に繋がる英語指導のあり方についても考察する。 到達目標は下記のとおりである。 ・認知言語学の言語観について理解することができる。 ・構文文法の文法観を理解することができる。 ・構文文法の知見を英語教育（文法・構文指導）に活用する具体的な方法を考案することができる。	
			英語科教育実践演習　－イギリス文学論－	この科目では、イギリス小説研究の知見を英語教育に活用することをめざし、文学作品の豊かな英語表現を味わい、作品が描くさまざまな問題を多角的に検証し批評眼を養うことを目標とする。題材としては日本生まれの英国人作家Kazuo Ishiguroの作品から、日本を舞台にしたAn Artist of the Floating Worldを通読し、その後、大変な話題作となった代表作、 Never Let Me Goの脚本を読む。一人の日本的アイデンティティを持つ英国人作家が、小説と映画を通して、人間存在についてどのように描いているのかを考察し、文学作品への理解を深め、また、授業中のディスカッションを通して、多角的な批評眼を養い、異文化理解や他者理解を深める。 また、実際に作品を読むことを通して、文学研究の知見を効果的に英語教育に還元するためのヒントを受講生が得ることを目指す。 到達目標は下記のとおりである。 ・文学作品の精読を通じて、舞台となる社会や文化、歴史的背景に対する理解を深める。 ・文学作品の英語表現を理解し、解読し、読解力の向上を目指す。 ・時代を代表する文学作品のテーマを多角的に検証し、多様性や差異を尊重する英語教育の在り方を考える。	
			英語科教育実践演習　－語彙指導－	（英文）　This class will focus on teaching and learning vocabulary with regard to the curriculum、 the language teacher、 and the learner. Analyzing tasks、 activities、 lessons、 and courses with regard to perspectives that account for aspects of cognitive involvement、 language acquisition、 lesson planning、 and course design. （和訳）　このクラスでは、カリキュラム、語学教師、学習者に関する語彙の指導と学習に焦点を当てる。認知的関与、言語習得、授業計画、およびコース設計の側面を説明する視点に関して、タスク、アクティビティ、レッスン、およびコースを分析する。 到達目標は下記のとおりである。 （英文） (1) Students will learn the principles of cognitive processing involved in language learning. (2) Students will analyze techniques and develop task sequences designed to optimize language learning. (3) Students will analyze and discuss aspects of course design to provide balanced lessons that foster language learning. （和訳） （1）学生は言語学習に含まれる認知処理の原理を学びます。 （2）生徒は技術を分析し、言語学習を最適化するように設計されたタスクシーケンスを開発します。 （3）生徒はコースデザインの側面を分析して話し合い、言語学習を促進するバランスの取れたレッスンを提供します。	
		教科研究開発高度化系コース共通	授業力熟達の理論と課題	本授業では、授業力の熟達に焦点化して考える。また、受講者自身の授業力を省察し、それを向上させるための方策を構想する活動を導入する。文献講読を通して、授業力の熟達に関する多様な文献を学習する。各自の興味関心の中から、学術書や学術雑誌等に掲載されている文献を選択し、レポーターの発表をもとに、ディスカッションを行う。 授業力とその熟達に関する知識や理論を獲得し、それを充実させるための方法論を習得する。具体的には、次のような目標を満たすことが期待される。 ・「授業力」、すなわち、授業の設計・展開・評価に関する教師たちの信念・知識・技術とその形成に関する諸研究の知見を整理できる。 ・教師のライフステージを通して授業力が熟達していく過程及び課題を理解するとともに、その特徴、課題克服へのアプローチについて考察できる。 ・受講生自身の授業力形成史を振り返るとともに、授業力形成計画書を作成して今後の教職生活を構想できる。 ・司会進行を受講生が行い、多様な意見を方向づけながら議論をまとめるスキルを身につける。	

			学校における道徳教育と道徳科	（概要）　現代学校教育における道徳教育と道徳科に必要な理論と課題を学ぶ。道徳教育を行う上で必要となる理論的背景やエビデンスをもとにして、実際に受講生自らが道徳科の授業を企画し実践することで、学校や教員としての関わり方を考えていく。 　到達目標は下記のとおりである。 ・道徳教育の意義と役割について理解する。 ・個人や社会における課題への対応について道徳教育の観点からアプローチする方法を学ぶ。 ・道徳科の授業を実践する上で必要な知識と技法を身につける。 （オムニバス方式／全15回） （９　相澤伸幸／7回） 　第1回から第7回にかけて、道徳理論の本質、道徳性の発達と心の成長、道徳教育の目標と内容、道徳教育の方法と評価、道徳科の授業の構想・設計、道徳科の指導案作成、授業評価を論じる。 （73　神代健彦）／8回） 　第8回から第15回にかけて、主として自分自身に関すること、主として人との関わりに関すること、主として集団や社会との関わりに関すること、主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること、この４テーマについて、模擬授業演習と授業批評演習を実施する。	オムニバス方式
			子どもの臨床心理学的アセスメントと支援	（概要）子どもの臨床心理学的な理解として、深層心理学の視点を中心に、子どもの情緒的発達、親子関係や教師との関係、学校現場の集団力動、子どもの行動のもつ意味とその背景について理解を深めるとともに、その支援の方法についても検討する。さらに学校園における実践事例の検討を通してその実際を学ぶ。 　到達目標は下記のとおりである。 ・子どもを理解するための臨床心理学的な理論や視点について理解する。 ・子どものアセスメントの方法について理解する。 ・子どもの問題行動への理解と支援の方法について学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （27　西村佐彩子／12回） 　第1回では、オリエンテーションとして、授業の概要と到達目標について説明する。第2回から第6回までは、子どもの臨床心理学的理解のための理論として、乳幼児期・児童期の情緒的発達、青年期の情緒的発達、力動論、親子関係・家族力動、教師との関係・集団力動を取り上げる。第7回と第8回では、子どもの臨床心理学的アセスメントの方法として、面接・観察によるアセスメントと心理検査によるアセスメントを取り上げる。第10回と第11回では、子どもと家族への臨床心理学的支援として、学校カウンセリング総論、プレイセラピー・子どもの心理療法を取り上げる。第13回と第14回では、事例研究として、幼稚園等及び小学校等での事例を受講者から募り、事例への理解と支援について検討する。 （64　森孝宏／3回） 　第9回では、子どもの臨床心理学的アセスメントの方法として、精神医学的なアセスメントを論じる。第12回では、子どもと家族への臨床心理学的支援として、親面接・家族療法を論じる。第15回では、事例研究として、中学校・高等学校等での事例を受講者から募り、事例への理解と支援について検討する。	オムニバス方式
			発達障害の特性と基本的対応	（概要）　発達障害は多様な状態像を示す障害である。発達障害を理解するためには、本人だけでなく本人を取り巻く環境も含めて理解する必要がある。本科目では、発達障害のある子どもや成人の基本的な障害特性や状態像の理解に留まらず、保護者支援の方法、環境の調整、本人支援の方法などに関する基本的な事柄について学ぶことを目的とする。 　到達目標は下記のとおりである。 ・発達障害の基本的な認知特性、行動特性を説明することができる ・発達障害の児童生徒への基本的な対応について理解し、支援方法を立案することができる ・発達障害のある児童生徒及び保護者の困難をイメージすることができる （オムニバス方式／全15回） （76　牛山道雄・49　小谷裕実・78　佐藤美幸／2回）（共同） 　第1回でオリエンテーションを実施し、授業概要及び授業の到達目標を確認する。第15回では授業のまとめとして発達障害の認知・行動特性に対して、学校という環境をどのように調整していくことができるのかを議論する。 （76　牛山道雄／5回） 　第2回において特別支援教育の概要と動向を論じる。第6回において自閉スペクトラム症の認知・行動特性の理解を論じる。第7回において自閉スペクトラム症の基本的な対応を論じる。第10回ではその他の発達障害について発達性協調運動症について取り上げる。第12回において発達障害と発達アセスメントを論じる。 （49　小谷裕実／4回） 　第3回から第5回にかけて、発達障害の診断、発達障害の脳機能、発達障害への薬物療法を取り上げる。第13回において発達障害と保護者支援：医療と教育の連携からのアプローチを論じる。 （78　佐藤美幸／4回） 　第8回及び第9回において注意欠如・多動症の認知・行動特性の理解、基本的な対応を論じる。第11回において発達障害と心理アセスメントとして知能検査の概要を取り上げる。第14回において発達障害と保護者支援：心理的な側面からのアプローチを論じる。	オムニバス方式・共同（一部）

			教科内容構成論　－国語科－	（概要）　この科目では、語彙論、文法論、言語習得論等、関連分野の最新の研究成果を踏まえ、学校教育において「ことばの力」を育てるために必要な教育内容の捉え直しを行う力を育成する。授業はオムニバス形式で行い、前半は日本語学の観点から、書かれたり話されたりする「ことば」を多角的・客観的に分析することを行う。後半は言語習得や言語学習に関する理論を学び、授業実践への活用を考える。 到達目標は下記のとおりである。 ・教育現場における「ことば」に関する現象を抽象化し、理論・モデルの中でとらえ、また具体的な現象として解決していく「現場と理論の往還」を実践することができる。 ・そのために必要な理論やデータ収集・分析の方法を理解することができる。 （オムニバス方式／全15回） （79　中俣尚己／8回） 第1回のガイダンスを実施する他、日本語学に関わるトピックを検討する。第2回から第8回まで、ことばのデータサイエンス、計量語彙論、教科書作品の語彙分析、コーパスを用いた様々なジャンルの語彙比較、文法と教育を巡る現代的課題、コーパスを用いた文法分析の実践をとりあげる。 （50　濵田麻里／7回） 第9回から第14回まで、言語能力、言語習得のプロセス、読み書きのプロセス、内容と言語の統合学習、授業過程の分析をとりあげる。第15回では授業のまとめを担当する。	オムニバス方式
			教科内容構成論　－社会科－	（概要）　社会科（地歴科、公民科）について、関連する各分野の専門的な知見と学校教育との関連付けで捉え、それを現代の教育課題に対応した教材研究や教材開発などに活かしていくことのできる力を育成する。 新科目「公共」について、関連する分野における専門的な知見を修得し、授業を行う際の教材研究能力や教材開発能力を高めることができることを到達目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （96　比良友佳理／4回） 第1回から第4回まで、法教育、知的財産権、インターネット時代の著作権と表現の自由など、法律学の観点から「公共」を論じ、学校教育との関連付けを捉える。 （82　斉藤恵太／5回） 第5回から第9回まで、「公共」を近世、近代、現代と歴史的に捉えて議論し、授業実践への活かし方を論じる。 （57　土屋雄一郎／6回） 第10回から第15回まで、情報化社会、グローバル社会など、社会学の観点から「公共」を多面的に論じる。	オムニバス方式
			教科内容構成論　－数学科－	（概要）　この科目では、小学校から高等学校までの算数・数学の教育内容について、各分野に関連する内容とその系統性や専門的な基礎理論とのつながりについて学びを深める。算数・数学の授業を構成する際、よりよい中心発問や補助質問を設定するには、対象となる児童・生徒の理解(児童観・生徒観)はもちろんであるが、取り扱う内容の正しい数学的理解(教材観)が必要である。算数・数学教育と各分野の専門数学とのつながりを学ぶことで、よりよい授業作りに専門数学で学んだ知識を役立てる力の育成を目指す。 算数、数学教育で取り上げられる教科内容と、そのもととなる基礎理論とのつながりが正しく理解できることを到達目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （58　深尾武史／9回） 第1回から第2回まで、算数、数学教育と専門数学とのつながりを論じる。第3回から第5回まで、代数学の観点から、算数、数学教育に表れる基礎理論を論じる。第6回から第8回まで、幾何学の観点から、算数、数学教育に表れる基礎理論を論じる。第15回に、授業のまとめを担当する。 （98　水上雅昭／3回） 第9回から第11回まで、解析学の観点から、算数、数学教育に表れる基礎理論を論じる。 （97　川原田茜／3回） 第12回から第14回まで、算数、数学教育と応用数学との関連性を論じる。	オムニバス方式

			教科内容構成論　－理科－	（概要）　人と自然の関わりにおける自然科学４分野の新しい知見をもとに、その背景となる科学的な見方・考え方の形成を図る。また、それらの理解を探究的に深める学びについて様々な指導・支援方略について学ぶ。物理分野では、身近な現象から法則を見出したり、法則から現象を予測したりする活動を通して、自然を理解するための基本的な概念や手法を学ぶ。化学分野では身の回りのものを物質として捉え日常生活や自然を化学的な視点から理解する。生物分野では、学習指導要領にある生物の共通性と多様性について理解を深める。地学分野では、日常生活や社会との関連を図りながら、地球や地球を取り巻く環境の時空間的な変化を総合的に理解する。 　到達目標は下記のとおりである。 １　物理や化学分野の科学的な見方・考え方を理解し、適切な指導ができる。 ２　生物や地学分野の科学的な見方・考え方を理解し、適切な指導ができる。 ３　身近な自然を対象に、物理・化学・生物・地学分野の学びを深める教材を考案できる。 （オムニバス方式／全15回） （60　梶原裕二・61　田中里志・17　谷口和成・84　鈴木祥子／3回）（共同） 　第1回で授業の概要を説明する。第12回で教材指導案開発のための資料収集を取り上げる。第15回で授業のまとめを行う。 （60　梶原裕二／3回）　第2回から第4回まで、生物学分野について、動物、植物、細胞の多様性と共通性について論じる。 （84　鈴木祥子／3回）　第5回から第7回まで、化学分野について、物質のすがた、物質の変化、私たちの生活をとりまく物質について取り上げる。 （17　谷口和成／2回）　第8回と第9回で、物理学分野について、物理の見方・考え方を、力と運動、電気と磁気をとりあげて、論じる。 （61　田中里志／2回）　第10回から第11回まで、地学分野について、惑星としての地球、変動する地球と私たちの生活について取り上げる。 （17　谷口和成・84　鈴木祥子／1回）（共同） 　第13回で、物理・化学分野についての教材・指導案開発について模擬授業を行う。 （60　梶原裕二・61　田中里志／1回）（共同） 　第14回で、生物・地学分野についての教材・指導案開発について模擬授業を行う。	オムニバス方式・共同（一部）
			教科内容構成論　－音楽科－	（概要）　授業を構成する重要な要素として、教育内容、教材・教具、指導法が挙げられる。音楽科はとりわけ教育内容と教材・教具が表裏一体性をもっているため、この両者を一体的に考える必要がある。つまり音楽科の授業を行う者は学習者に何を学習させるかを計画するために、教材・教具についての理解を深めながら、同時に学習者が何を学ぶべきかを導き出す必要がある。本講義ではこの立場から、音楽科で扱われる楽曲・楽器・創作のテーマについて教科専門の視野から理解を深めるとともに、それらをどのように授業の学習内容＝教育内容として捉え、教科内容として構成していけば良いかを探求する。本授業の到達目標は、①教育学の知見をもとに、授業における教材・教具・教育内容の理論を理解し、かつそれを現在の音楽科授業へと適用する場合の可能性と限界について理解することができる。②音楽科で扱われる楽曲・楽器・創作のテーマ等について、その文化的背景、楽曲の構造、表現のポイント等を、主に音楽理論の視点から理解することができる。③音楽科で扱われる楽曲・楽器・創作のテーマ等について理解したことを生かし、授業構成の理論や現行の学習指導要領の視点を踏まえて大まかな教育内容（学習内容）を構想し、教科内容の構成原理について理解する。 （オムニバス方式／全15回） （30　樫下達也／5回）　第1回にオリエンテーションを実施し、授業の概要、到達目標、計画、評価について確認し、音楽科における「教科内容」とは何かについて考える。第2回に、音楽科授業における教材・教具・教育内容について取り上げる。第3回では、音楽科学習指導要領にみる「教科内容」について取り上げる。第14回及び第15回において、音楽科の教科内容の構成について、上記各分野で深めた内容を活かして取り組む。 （30　樫下達也・93　田邉織恵／1回）（共同）　第4回で、歌唱指導の意義について、その音楽教育史上の経緯を踏まえて、その意義、留意点について論じる。 （93　田邉織恵／1回）　第5回で、小学校および中学校の歌唱共通教材について、その文化的背景、楽曲の構造、表現のポイント等を音楽理論の視点から理解し、教育内容の視点から考察する。 （30　樫下達也・68　山口博明／1回）（共同）　第6回で、器楽指導の意義について、その音楽教育史上の経緯を踏まえて、その意義、留意点について論じる。 （68　山口博明／1回）　第7回で、器楽教材について、その文化的背景、楽曲の構造、表現のポイント等を音楽理論の視点から理解し、教育内容の視点から考察する。 （30　樫下達也・69　小笠原真也／1回）（共同）　第8回で、鑑賞指導の意義について、その音楽教育史上の経緯を踏まえて概説する。 （69　小笠原真也／1回）　第9回で、中等教育の教科書に示された鑑賞教材について、その文化的背景、楽曲の構造、鑑賞のポイント等を音楽理論の視点から理解し、教育内容の視点から考察する。 （30　樫下達也・67　田中多佳子／1回）（共同）　第10回で、世界の音楽や日本の伝統音楽を教材として扱うことの意義について、その音楽教育史上の経緯を踏まえて概説する。 （67　田中多佳子／1回） 　第11回で、日本の伝統音楽について、その文化的背景、楽曲の構造、鑑賞やポイント等を音楽理論の視点から理解し、教育内容の視点から考察する。 （30　樫下達也・94　増田真結／1回）（共同）　第12回で、創作指導の意義について、その音楽教育史上の経緯を踏まえて概説する。 （94　増田真結／1回）　第13回で、幅広く多様な「作曲」概念について音楽理論の視点から理解し、教育内容の視点から考察する。	オムニバス方式・共同（一部）

			教科内容構成論　－美術科－	（概要）　この科目では、デザイン、工芸、書道、美術理論・美術史の各分野の最新の研究動向を理解するとともに、それらの専門的な知識および技能を小・中・高等学校における教科内容の観点から捉え直すことのできる力を育成する。そのため、各分野の教員が協働して授業を担当する。 　到達目標は下記のとおりである。 1．美術科の各分野の専門性を理解できたか。 2．美術科の各分野の最新の研究動向を理解できたか。 3．学校教育における教科内容の観点から美術科の各分野の専門性を捉え直すことのできる力を育成できたか。 （オムニバス方式／全15回） （95　日野陽子／3回） 　第1回で、オリエンテーションとして、美術教育の各分野の最近動向を紹介する。第14回と第15回で、各分野の専門性と美術科の教科内容をいかに捉え直し、結びつけるかを論じる。 （70　安江勉／3回） 　第2回から第4回まで、デザイン分野の専門知識と教科内容をいかに結びつけるかを考察する。 （71　丹下裕史／3回） 　第5回から第7回まで、工芸分野の専門知識と教科内容をいかに結びつけるかを考察する。 （72　岡田直樹／3回） 　第8回から第10回まで、書道分野の専門知識と教科内容をいかに結びつけるかを考察する。 （31　山内朋樹／3回） 　第11回から第13回まで、美術理論・美術史分野の専門知識と教科内容をいかに結びつけるかを考察する。	オムニバス方式
			教科内容構成論　－保健体育科－	この科目では、保健体育科の各専門分野の最新の研究動向を理解するとともに、各体育実技の最新理論も学び、それらの専門的な知識および技能を小・中・高等学校における教科内容の観点から捉え直すことのできる力を育成する。到達目標は以下のとおりである。 １．学校教育における保健体育に関する最新の研究動向を理解する。 ２．小・中・高等学校における体育のカリキュラム構成を理解する。 （89 林英彰・101 岡田雄樹） 　全回を共同して担当する。	共同
			教科内容構成論　－技術科－	（概要）　この科目では、技術科に関連する最新の研究成果を踏まえた専門的知識および技能を取り上げ、それらを学校教育における教科内容の観点から捉え直すことのできる力を育成する。 　到達目標は下記のとおりである。 ・普通教育としての技術教育である技術科教育の授業の構造、授業を構成している要素を理解する（工業分野を含む）。 ・技術科教育の理論と教育実践を結ぶ教育課程の構造を強化し、その理論の教育現場での応用・実践について分析することができる。 （オムニバス方式／全15回） （18　原田信一／4回） 　第1回にオリエンテーションとして授業の内容と今後の計画について説明する。第2回と第3回で、材料加工分野の理論の授業実践を論じる。第15回で、情報機器及び教材の活用を論じ、講義のまとめを行う。 （63　南山泰宏／2回） 　第4回と第5回で、生物育成の基礎と応用について、授業実践を論じる。 （88　中峯浩／3回） 　第6回から第8回まで、エネルギー変換について、ロボット及び電気回路を取り上げ、その授業実践を論じる。 （87　伊藤伸一／3回） 　第9回から第11回まで、情報分野の基礎として、プログラミングを取り上げ、その授業実践を論じる。 （62　多田知正／3回） 　第12回から第14回まで、情報分野の応用として、ネットワーク及び計測制御を取り上げ、その授業実践を論じる。	オムニバス方式

			教科内容構成論　－家庭科－	（概要）　この科目では、家政科の各専門分野の最新の研究動向を理解するとともに、それらの専門的な知識および技能を小・中・高等学校における教科内容の観点から捉え直すことのできる力を育成する。到達目標は下記のとおりである。 １　家政科の各専門分野の最新の研究動向を理解する。 ２　家政科の各専門分野の内容を教科内容の観点から捉えることができる。 （オムニバス方式／全15回） （19　井上えり子／5回） 第1回にオリエンテーションとして授業の概要と到達目標について説明する。第12回から第15回まで、衣生活、食生活について、家庭科教育の視点から論じる。 （92　深沢太香子／5回） 第2回から第6回まで、衣生活分野について、被服材料、被服構成、被服衛生、被服整理、被服心理の研究動向を論じる。 （65　湯川夏子／5回） 第7回から第11回まで、食生活分野について、健康、嗜好性、安全性、食文化、環境などにわたり、研究動向を論じる。	オムニバス方式
			教科内容構成論　－英語科－	（概要）　本授業では、近年の言語学・言語習得研究・英語教育学の成果を活用することで教科内容を捉え直し、より深く豊かな授業を構想する力を育成する。 到達目標は下記のとおりである。 ・近年の言語学・言語習得研究・英語教育学に関する様々な理論を理解することができる。 ・上記の理論から教科内容を構成し、授業を構想することができる。 （オムニバス方式／全15回） （53　児玉一宏／3回） 第1回にオリエンテーション後、言語学と英語教育の接点を論じる。第2回と第3回で、言語学・言語習得研究の観点から、その知見の英語教育への活用を論じる。 （15　西本有逸／12回） 第4回から第15回まで、英語教育学の観点から、英語リスニング理論、英語リーディング理論、英語スピーキング理論、英語ライティング理論、英語コミュニケーション理論など、種々の理論と授業実践を論じ、教科内容を構成し、授業を構想する力を育成する。	オムニバス方式
			教科内容教材論　－国語科－	（概要）　この科目では、国語科の主たる教材の一つである文学教材に関して、高度な指導力や、現代の教育課題に対応した教材研究・教材開発を行うことができる力を養成するために、その基礎となる教科内容について、学校教育と有機的に結び付けながら理解を深める。授業担当者の専門領域に即して、日本近現代文学および漢文学の教材をとり上げる。 到達目標は下記のとおりである。 1. 文学教材について教材研究の方法を身につけている。 2. 文学教材について現代の教育課題と関連づけながら新たな教材開発を行うことができる。 （オムニバス方式／全15回） （51　天野知幸／7回） 第1回から第7回まで、近現代文学を対象とし、教科書で取り上げられることの多い近現代文学作品について、文学教材としての教材研究の方法について論じる。 （52　谷口匡／7回） 第8回から第14回まで、漢文を対象とし、教科書で取り上げられることの多い漢詩について、文学教材としての教材研究の方法について論じる。 （51　天野知幸・52　谷口匡／1回）（共同） 第15回に文学教材の教材研究・教材開発について総括する。	オムニバス方式・共同（一部）

			教科内容教材論　－社会科－	（概要）　社会科（地歴科、公民科）について、関連する各分野の専門的な知見と学校教育との関連付けで捉え、それを現代の教育課題に対応した教材研究や教材開発などに活かしていくことのできる力を育成する。 　到達目標は下記のとおりである。 ・社会科（地歴科、公民科）について関連する分野における専門的な知見を修得することができる。 ・社会科（地歴科、公民科）の授業を行う際の教材研究能力や教材開発能力を高めることができる。 （オムニバス方式／全15回） （54　香川貴志／3回） 　第1回から第3回まで、地理分野について、高校入試、教員採用試験、大学入試に出題された地形図読図問題について論じ、受講生が作成したオリジナル問題を議論して、地理分野の総括を行う。 （83　武島良成／4回） 　第4回から第7回まで、歴史分野について、歴史と教科書について論じ、教材研究につながる専門的な知見を紹介する。 （56　石川誠／4回） 　第8回から第11回まで、経済分野について、経済成長とＧＤＰ、景気、日本の財政と金融、国際貿易を考察し、教材研究につながる専門的な知見を紹介する。 （55　荻野雄／4回） 　第12回から第15回まで、政治分野について、大統領制と議院内閣制、政治制度改革を考察し、教材研究につながる専門的な知見を紹介する。	オムニバス方式
			教科内容教材論　－数学科－	この科目では、算数・数学教育の教科内容について、厳密な論理と照らし合わせながら、具体的な中心発問や補助質問などについて考察する。算数・数学の授業を構成する際、よりよい中心発問や補助質問を設定するには、対象となる児童・生徒の理解（児童観・生徒観）はもちろんであるが、取り扱う内容の正しい数学的理解（教材観）が必要である。教科内容の基礎理論や学習意義を再確認し、児童・生徒が数学的な見方・考え方を働かせ数学的活動を通じて主体的に学ぶことのできるための中心発問や補助質問の設定を試みる。 　到達目標は下記のとおりである。 ・教科内容のもととなる数学の基礎理論が正しく理解できる。 ・児童生徒が既習事項をもとにして説明しようとする姿が育成できるような中心発問や補助質問が設定できる。 ・児童生徒が定義をもとにして説明しようとする姿が育成できるような中心発問や補助質問が設定できる。	
			教科内容教材論　－物理－	物理概念の定着を促す初等・中等理科教育における物理授業のあり方について、理論的・実践的な視点からアクティブ・ラーニング形式の授業を行う。特に、欧米の先進的なカリキュラムや教科書およびコンテンツを紹介し、受講者間の積極的な議論や模擬授業等を通して、日本の現状と比較検討する。 　到達目標は下記のとおりである。 ・物理の主要な分野（【力学】【振動・波】【熱】【電気】【電磁気】【電子・原子】）における子どもの素朴概念や誤概念を理解する。 ・物理の主要な分野における教材開発の視点を理解する。 ・物理概念の理解および定着を促すアクティブ・ラーニング型の授業を構築できる。	
			教科内容教材論　－化学－	（概要）　小・中学校及び高等学校の理科で取り扱われる内容のうち、化学に関係する概念や実験などの学習事項を、化学分野の専門的知識や理論と関係づけ、化学の専門の立場から考察する。専門の理論や実験の教育現場への応用についても取り上げる。実験等を交えて行なうこともある。 　到達目標は下記のとおりである。 １．学校での化学に関係する学習事項を、化学分野の専門的知識や理論と関係づけて説明や考察ができる。 ２．化学の理論や実験の教育現場への応用について、考察や工夫ができる。 （オムニバス方式／全15回） （59　向井浩・84　鈴木祥子／1回）（共同） 　第1回で、授業ガイダンスを実施し、授業の概要を説明する。 （59　向井浩／7回） 　第2回から第8回まで、理科教育（化学分野）の文献調査、分子模型の工作、分子模型を用いた模擬授業を行い、電解質溶液の化学平衡を説明する。 （84　鈴木祥子／7回） 　第9回から第15回まで、有機化学分野について、実験の安全確保に関して説明し、化合物の同定法、有機分子の合成、有機化学の演示実験を行う。	オムニバス方式・共同（一部）
			教科内容教材論　－生物－	理科教育で扱われる内容のうち、生物教材の確保、取り扱い及び教育的意義に関する基礎的情報や背景についての講義・演習を行う。理論と実践を関連づけ、小中高における実践を考慮した内容を学ぶ。 　到達目標は下記のとおりである。 １　実際に生物を指導する際に必要な教材に関する深い知識、技能を身につける。 ２　生物教材を開発し、実践することができる。 （60 梶原裕二・85 今井健介・86 藤浪理恵子） 　全回を共同して担当する。	共同

			教科内容教材論　－地学－	理科教育で扱われる内容のうち、地学教材の確保、取り扱い及び教育的意義に関する基礎的情報や背景についての講義ならびに演習（野外実習を含む）を行う。特に、理論と実践を関連づけて、小・中・高等学校における授業実践を考慮した内容を学ぶ。 到達目標は下記のとおりである。 ・地学を指導する際に必要な基礎的な知識、地学教材の提示法や扱い方、地学の授業を行う上での技能を身につけることができる。 ・地学における新しい研究法ならびに最新の話題に対する理解を深めるとともに、地学教材を開発し、実践することができる。	
			教科内容教材論　－音楽科－	（概要）　この科目では、音楽科の専門的内容と学校教育とを関連づけて捉え、現代の教育課題に対応した教材研究や教材開発に活かしていくことのできる力を育成し、授業展開の可能性について探る。 到達目標は下記のとおりである。 1. 音楽科の教科内容について理論的および実践的に理解することができる。 2. 発達特性の観点より音楽科の教科内容の体系について理解することができる。 3. 音楽科の各活動領域において教材の特性を生かした教材研究をすることができる。 4. 教材の特性を生かした音楽科授業をデザインすることができる。 5. 音楽科において教材の働きとは何か、教材研究や授業展開を通して理解することができる。 （オムニバス方式／全15回） （20　清村百合子／9回） 第1回にオリエンテーションを実施し、教科内容という観点から教材を捉え直す意義を考察し、第2回から第5回まで、音楽科の教科内容、「教材」と「教科内容」の関係性、発達段階と教科内容の関係性、教材開発の視点について論じる。 第12回から第15回では、第6回から第11回までの各分野の教材研究を踏まえて、それを活かした授業デザイン（構想、立案、検討）について論じる。 （93　田邉織恵／1回） 第6回で、歌唱教材について教科内容の観点より教材研究を行い検討する。 （68　山口博明／1回） 第7回で、器楽教材について教科内容の観点より教材研究を行い検討する。 （94　増田真結／1回） 第8回で、創作教材について教科内容の観点より教材研究を行い検討する。 （69　小笠原真也／1回） 第9回で、鑑賞教材について教科内容の観点より教材研究を行い検討する。 （67　田中多佳子／2回） 第10回と第11回で、日本伝統音楽、世界の音楽の教材について教科内容の観点より教材研究を行い、検討する。	オムニバス方式
			教科内容教材論　－美術科－	（概要）　デザイン、工芸、書道、美術理論・美術史各分野の専門的知識や技能を教科内容に結びつけ、現代の教育課題を視野に入れた教材の探究をおこなう。そのため、各分野の教員が協働して授業を担当する。 到達目標は下記のとおりである。 1. 現代の教育課題を理解し、各分野との関連性について考察できる。 2. 各分野の専門性を普通教育の教材として生かしていくための新たな視点を獲得する。 3. 各分野を相互に関連させた教材を探究する力を身につける。 （オムニバス方式／全15回） （95　日野陽子／3回） 第1回でオリエンテーションとして美術教育における今日的課題について論じる。第14回と第15回で、美術教育として、学校種における教材の探究、各専門分野間の関連と教材開発について論じる。 （31　山内朋樹／3回） 第2回から第4回まで、美術理論・美術史について、現代の教育課題との関連性を論じ、教材探究を考察する。 （70　安江勉／3回） 第5回から第7回まで、デザインについて、現代の教育課題との関連性を論じ、教材探究を考察する。 （71　丹下裕史／3回） 第8回から第10回まで、工芸について、現代の教育課題との関連性を論じ、教材探究を考察する。 （72　岡田直樹／3回） 第11回から第13回まで、書道について、現代の教育課題との関連性を論じ、教材探究を考察する。	オムニバス方式

			教科内容教材論　－保健体育科－	（概要）　保健体育科における健康教育やＩＣＴを活用した教育について、体育、保健に関する教育、運動部活動や地域のスポーツ活動などとも関連づけて捉え、小・中・高等学校における現代的な教育課題を解決していくための教育実践をデザインできる力を育成する。 　到達目標は下記のとおりである。 １．健康教育に関する研究内容や研究方法を理解し、教育実践に応用することができる。 ２．保健体育科におけるＩＣＴの利活用について理解し、教育実践で用いることのできるコンテンツが作成できる。 （オムニバス方式／全15回） （100 浅沼徹・29　小山宏之／1回）（共同） 　第1回で、オリエンテーションとして授業の概要、授業の進め方と到達目標を説明する。 （100 浅沼徹／7回） 　第2回から第8回まで、健康教育について取り上げ、保健教育の教材開発について論じる。 （29　小山宏之／7回） 　第9回から第15回まで、体育授業におけるＩＣＴの利活用について取り上げ、体育授業で活用できる短時間動画コンテンツの作成を行う。	オムニバス方式・共同（一部）
			教科内容教材論　－技術科－	（概要）　この科目では、技術科の専門的内容と学校教育とを関連付けて捉え、現代の教育課題に対応した教材研究や教材開発に活かしていくことのできる力を育成する。 　到達目標は下記のとおりである。 ・技術教育の目標と意義を考慮して、具体的な指導内容と教材製作や開発との関係を理解できる ・具体的な教育内容の構成、教材と指導法の選択、これに必要なスキル等の重要性を理解できる ・児童・生徒に対するものづくりと情報の学習指導における問題点と指導上の課題を理解できる （オムニバス方式／全15回） （18　原田信一／7回） 　第1回でオリエンテーションとして授業の内容と今後の計画について説明する。第2回から第4回まで、教育内容、教材教具、製作品の事例調査と分析、構想と設計について取り上げる。第5回から第6回まで、材料と加工について取り上げ、教材教具開発と試作を行う。第15回で授業のまとめを行う。 （63　南山泰宏／2回） 　第7回と第8回で、教材教具開発と試作に関して、生物育成をテーマに取り上げる。 （88　中峯浩／2回） 　第9回と第10回で、教材教具開発と試作に関して、エネルギー変換をテーマに取り上げる。 （87　伊藤伸一／2回） 　第11回と第12回で、教材教具開発と試作に関して、情報（プログラミング）について取り上げる。 （62　多田知正／2回） 　第13回と第14回で、教材教具開発と試作に関して、情報（ネットワーク、計測制御）について取り上げる。	オムニバス方式
			教科内容教材論　－家庭科－	（概要）　この科目では、家政科の各専門分野における研究内容を小・中・高等学校の家庭科教育と関連付けて捉えるとともに、小・中・高等学校における現代的な教育課題を解決していくための教育実践をデザインできる力を育成する。 　到達目標は下記のとおりである。 １　家政科の各専門分野の研究内容を小・中・高等学校の家庭科教育と関連付けて捉えることができる ２　現代的教育課題を解決するための教育実践をデザインできる （オムニバス方式／全15回） （19　井上えり子／5回） 　第1回でオリエンテーションとして授業の概要と到達目標について説明する。第12回から第15回まで、家庭科教育の視点から、教育実践（食生活、衣生活、住生活、消費生活分野）のデザインについて論じる。 （66　延原理恵／5回） 　第2回から第6回まで、住生活分野と家庭科教育について、健康、快適、安全、生活文化の継承、持続可能な社会という視点から論じる。 （91　權眞煥／5回） 　第7回から第11回まで、生活工学分野と家庭科教育について、ＩＣＴ教育の視点から論じる。	オムニバス方式

			教科内容教材論　－英語科－	（概要）　本授業では、英語科における教材をどのように用いたら効果的に授業を展開できるかに関して理論的に内容を学習するだけでなく、どのように実践に応用していくかに関して学ぶ。そして、実際の現場で、様々な理論的な事項を実践に応用する方法に関して講義を通して身につけることで、今後英語教員として必要とされる教材に関する事項に関して知見を深めることを目的としている。 　到達目標は下記のとおりである。 ・英語科の教材に関する様々な理論を理解することができる。 ・英語科の教材に関する理論を実践に応用することができる。 （オムニバス方式／全15回） （99 染谷藤重・81　オーバーマイヤー・80　奥村真紀／1回）（共同） 　第1回で、オリエンテーションとして授業の内容を説明し、英語科の教材について論じる。 （99 染谷藤重／10回） 　第2回と第3回で、英語教育における教材に関する理論的背景を説明する。第6回から第9回まで、小学校及び中学校の英語における教材について検定教科書を通じて論じる。第10回で、教材論から英語の円滑な小中連携について論じる。第13回と第14回で小学生の聞く話す読み書きについて、指導教材についても理論と実践について論じる。第15回でデジタル教材の使用に関する理論と実践について論じる。 （81　オーバーマイヤー／2回） 　第4回と第5回で、英語科教育におけるポジティブ心理学について理論と実践の両面から論じる。 （80　奥村真紀／2回） 　第11回と第12回で、小中学校における英文学教材に関する扱いについて理論と実践の両面から論じる。	オムニバス方式・共同（一部）